訓蒙

序 凡例

大綱

一

津田文庫
文庫 1
1604
1

早稲田大学圖書館藏書

梁（シヲリブミノハ）性（シ）旨（ガキ）書

天神御子（アマツカミノミコノミコトヲ）平（ヒサ）久（カタ）之（ノ）乃（アメ）八（ノヤ）

隅（チマタ）尓（ニ）迎（ムカヘマツリテ）事（ア）而（マ）下（ギ）座（ラ）藏（フ）云（ヤ）布（ヘ）八重

多（タ）那（ナ）雲（グモ）平（ヲ）押（オシ）分（ワケツヽ）給（アサ）日（ヒ）乳（ノ）魚（タヾ）東（テス）

日（ヒ）向（ムカノク）國（ニヽ）爾（アモリ）天（マ）降（ス）麻（タマ）浜（ボコ）玉（ノ）鉾（ミチ）之（ヲ）

つだ文庫

ISSEIDO 成書 東京

010190595701

1604

乃汁覓者南苅爾立之亘仕事
志猶田畏大神乃終尓當空
坐而長伎奉皇大御神之幸川
乎志母待取事之〻此神風之
伊勢國二藤隨津者久天六

四方尓所仰岩川之薙伎之猶
長田之子十於乃河和信濃乎
探以當菅根之根藤一伏三向
御呂爾不飽飽味日本玄靈之
幸洪勢當大御國能奉伎事和

理乎甘美爾覺之心以石口振
乃神杉古伎乎姫女今世之鶴
伎新豆賀利彌遠猶渡其案之
枝乃片葉之天乎許其天乎此
山之天峰小峰乃繋木高乎

連以鶴君而不見隈其九お世
有事之云之葉乃新乎理乎奈
毛為を雖禮祁流有此樂之麻
麻尓斗賣新、多以入而志波
和摩繋山間夜之行為不去人

嘗如堂之後者朝霧乃擊之伎
感奈久不忘之八十之隈路而
爲彼在久之羈將見無魂
公負之而在此川之瀨之常
滑岩志無爾無雜事於在流

比傳唯得是此自彼大神之道
計覺之道且要之道那幣流事
乎之皇大神之大志心爾如何
當志戸社所思良賣之碩社
而思須良賣

回國人本兼宣長（オヤジクニビト モトヲリノノリナガ）

倭訓栞

凡例

我朝の古へハ語を書とし主らしなりして字を假とし從とし來れ
されハ日本紀古事記万葉集なと文字ハさほくに出たるそ中に
まことに義をこめ無るもあるりけりよて此書も假名をもて標出
し正字をもて訓詁とす

○此書五十音をもて次第し後のいうえを省きぬ是ハ四十七條を
立たり各條乃下もまた五十音に序てにより搜繞に便あし
めんかためなり

○此書假字つゝひとなりして訓義を解ゆ假字一たひ差ひぬれ
ハ訓義も亦從て謬るかつ訓義を曉して假字のまいためも來へ
たまふ事し

○假字つゝひハ古事記日本紀万葉集倭名鈔新撰字鏡等
の古書になつきて後世一家の私論を據とせて訓義されハ右の

古書なりとはいへどもなほ論なしその註釋の云又ありけり和語を解し出しも皆得失あり今その得たる所取用ねたるも多くは書名と著され唯といへりと云せり然れしきをいたひてしその餘をみなすれうる不固陋と忘まさく臆断せるものなりし

○我邦の語は會意あり轉注あり假借あり二合なるあり三合なるあり發語の辭あり助語の辭あり又雅語あり俗語あり雅語に讀書詞あり詠歌詞あり俗語に官府詞あり叢林詞あり雅俗とをに熟語あり縁語あり倭語に似て漢語あり韓語あり梵語あり蛮語あり これら悉く類とあらく聚めぬ

○予されは日本書紀通證と著述し神道のおほむき○故実のあらほ事によりおほふまてくしあらはしぬそう中にかうがへあらしぬる訓義又かの書に使ふれをの及後世にひなるへる言のなふなるとは書に委しく記し侍る既にかの書に詳なるはゆへりて大かたなるも亦多しされは彼に略らかめして此に侍りしぬは彼書と照し合せて考へ看たまへ也

○此書に假字及訓義の通證と齟齬せしも百か一ツは侍るへしそれは此書をもてく定説とす志かはあまたに神代の巻れぬきは塩土老翁の教へ等なほ及を重むし古傳の旨を失はんる事恐まてくおもんはかりあまりしもあらすそはよむ人辨へたまへかし

○言語浩繁なるまは簡帙もまた重大なる事をて分て三編とし今前編を刊行を此編をはつ古言雅語を解釈するものし

倭訓栞

洞津　谷川士清　纂

大綱

古人は開合正しく言に随て其義も亦ゆらかなれは別に倭語の学を立さるもや音博士なといへるも漢音呉音のまいだめ其訛謬を正をのまゆそみ之ゆ天平の時に至り右大臣吉備朝臣音韻の学に長せし事善相公の封事に見えて悉曇の僧は釋園仁入唐して南天の寶月三藏より得たりしを三代實録に見えたり悉曇翻して成就とを一切の事言文字によりて成就の義也

○凡天下の言に古言あり今言あり其古今の言に方言あり方言の中にまた吾雅言あり俗言あり古言の雅なる後の俗言となるあり古言乃俗なる後の雅言となるあり爾雅に古言今言其実あるなとなく釋詁といひ古今れる四方の言よく通ずるなれを解きて釋言といふ千載の下にまたまく千載の上に通し一方の内に在て四方の外に達しなん

孰きことゝいふ意かゝることゝいふ

○西方諸国のことゝれい方俗音韻と尚ひて文字もことゝれい尚ふおふゝ
す僅よ二十餘字のとりくこ天下の事物
さゝ事をもいへかゝす漢土れことゝれい其尚ふおふ之字ふおりくく音韻乃学
れことゝよい西方の長ゝめゝをとゝれ我東方のぬきいを尚よおふ言詞のおふ
ありて文字音韻の学い尚よところみゝもおりゝとされを天地のおな自
ら方言のり我東方れ声音のそくおるよをを声音のそくおるよをたゞ
を天地殺聲の音まゝて天下れ音我合せくくを中よおりゝすとゝいふことを
のおゝされとれ言詞のお芭音のおを天地のおな自ら声音ありて後ふ文字
我出古今の言よ相通せんい音韻の学ようすゝてまさ他よ求へゝくもも
おもはれすとぞ

○鄭夾漈ら説よ梵人長於音所得従聞入華人長於文所得従見入とゝふ
我邦の言詞を尚よ西竺の音韻を尚よおめゝ音文の二ふ就ていふくれそ
人生まさく言いさるいおゝ自ら声音ありて後ふ文字

あり文字い言語の象よとれさる故一ゝまて書い言を尽さんともゝふ
見聞の二つよ就ていそく聞の多博しく遠ゝされい我邦神徳君徳と称ー
て聞とゝふことの多く聰明叡智を謂て八耳とゝふ聞てをおら識さ
るるなれい言語の徳と古今集の序も力をもいまでゝして天地を動じ
目よそめ鬼神ともあはれとれとも、かゝるいおれ歌よ者のおとゝ
ふ、ゝもやまと方柴集よ部類とおて主とせる四季の歌
も相聞ゝもおい雑春雑夏なくゝふ但平安の言語のうたゝ事歌歌
の頃ふ發をる諒よ国とをく具用をるせいこまて梵筴ふも眼根功徳少耳
根功徳多の説あり又楞厳経よ此方真教体清浄在音聞とれゆされい仏
中観音大士を崇め梵経如是我聞成者とせり

○西土(にしこ)の韻語ゝ我邦い訓語ゝ韻語い文字ふようさされい其主義解ー
うゝーよそ文字をおかゝされい通用ーかゝー訓語いそのを義詞の上ふ
おりて文字ふ主ゝおかゝされい通用ーかゝー訓語いそのを義詞の上ふ
河ゝ紙芳て初ゝー訓語い韻語ようゝ精密みゝてまさ感通ーやをゝ

よて同語同字よてさまくと意義ありてすること豈倭語の妙處なるを
や仲氏も吾邦原有音無字乃備華字以紀單音疊音以成語故一語該
數音といへり

○言といひ詞といふ義我もよくまれまゝへきなれ聲成文謂之音と
發為言々之成文為詞とも見えたり先達の説に發語の詞也といひ詞助
也なといひし皆是也左右れ言の如きは其音單出してまれなりけら言となる
し多かり或はこまといはんとしてまれ其事の發して此語を起し如なる
なり是を發語の詞といひ又上れ詞助也なといへり或は其言れ餘音なる
ありこまを詞とも詞助ともいひ又其物に彼言あるによりて此言も出
來しことれ其詞を得て彼言れ將せしなるも少かしを或は彼と是との
言を合せくは言となるに彼是二ツの言れ相合ふ不を助けし詞
ある我中の詞助ともまたやをめ字なともいひしこまへて此等れなり
よりて自ら其言も長くは語も多くなりしと見えたりといへり

○古今集の序にやまと歌は人のおこるとたゝ○としてよろ所のことれなし

そなれりけると出出して一集れ大体をのへ和歌のなりを見せり種といひ
葉といふはなるたとひ人の心物に感せさるかとは草木の種れ土の中に著
如し既に感ぜられいたりてまなをのゆるものにつけくさなくにいひ出せる
は草木れ雨露のめくみにあひをえ出て柯葉の分れたるかなし相かなれ
言外にあらはれて後心の事ともよく知られて逃るゝ所なしといへり古より
言の字をこゝろよみ詞の字我ことばとよみ又ことれをともいひなるはせしは
葉れたとひをそへていへることといふくいらしるしよて和歌を指て正に言
葉といひしも多かり云の葉れ乃云の葉風詞の花詞の林なとも我邦
言の葉れ靈妙なる天地自然の理なる我かく万葉葉にも言靈のさきはふ
事とも事靈のたをたなしともいふあり言と事と相まちて用をなすを
我かく同しくこゝろいひそのかれた○のいつかり我く言ふいで事に
あらはる我かくまことくはいふなりまことは真言と真事とよて日本紀
には言語を正にまことくよあり文字を製せる人も誠信ホの字多くは言
に從つるも必ひ合せ也されは古人も所乃を評してを地ひらけしよりれ

神乃なれは文華をかさりてもまことを聞くはいつこつ事といへり

○古言は略せるゝことくなるは其朴之足を略していひしはあらず其朴なるゝ変して文となりぬる其言も亦自ら長くなりもきことをそふ極りぬ其は足を略していはさるゝ故得を此を花に比するに上世の言はぬきは其陪蕃之中世の言はえたの開けし之下世の云は其花乃爛熳に及しに其略していふは其を既に花て絶に殘まるをといへり

○一語多義にはたり一句数言を兼るは倭語の妙にして古事記日本紀にも欲はる字者の多数用られたり乃紫条に字義を兼て取まる故もて種々の出体を立られたり欲はうしたふの義声に發して聞を要とし詩乃こゝく文字韵律をもて主とすへかゝられは西土にて我邦の欲を記せしもまた字者をもて記して釋者切意なと附註し其義を明せしなるへきなりされは元住法師も倭欲は此国乃陀羅尼にといひき陀羅尼はもとより諷詠をへきものにて其用聲者になり又惣持多含の義ある故もてこれ法無量し

○古語拾遺に書契已來浮華競興顧問故實靡識根源といへり我国の古言を義隠を失せし事漢字行はまてく古文廃せしによりまるなれ乃多しとそれ細かに是を論しなんには此語と彼字と主客の分なれとあらはれ我国の言は太古の初よりいひつきしぬきは郎主之海外の言はぬきは郎客にさるを漢字盛に行ましにまては其義を并せて彼に従ひ是といふものなりしこれよりして後客絶に主となりて主はまた客となるに似たり古言は義猶今もさまるものあるは幸ありあけといへり

○文章と口語とはまかちは聖武紀に文則皇大夫人語則大御祖（ミオヤ）と見えたるぬきを見えされは皇大夫人とまておかみおやとよむへきに音讀と訓讀とはまかちは廢帝紀に敬依舊典追上尊号策稱勝寶感神聖武皇帝謚称天璽國押開豊櫻彦尊と見えたるは如きを見ゆ策稱は西土の謚法に擬し謚称は我邦の古義を存されはおのゝ別号とすまたる也類聚国史に神功皇后倭名大足姫命皇后成務天皇倭名稚足彦天皇と見えたるも亦同し

○漢字をもて倭語を記せし假名の書法古事記は呉者のことを取用ぬ

日本紀万葉集倭名鈔ホか者訓を併せ用ひて去せり旁假字(カタカナ)毋(ハヒ)假字(ヒラガナ)
書体も亦同し又日本紀古事記及令式ホか古き文ホ多くてやゝ清濁を通し用ゐるとそ
○本居氏の説に古事記の同音相通ひ假名の中にも語意ホありてあるホ用ゐ
を分てりホよホ淤意二字を音く用ゐ中に大ぶホ意富とのミ書て淤を
去例なし女姫なるめよホ賣とのミもて米を去ス妹のもよホ毛とのミ
去て母を去ス神のみホホ微とのミもて美をもすべてホ古をもて許と
去ス木城よホ紀を去大ホ肥とを去戸よホ斗をもて彼比登ゐくらホや
ゐなれのつゝ音の別てゐるや此記のごとを日本紀万葉集もまゝ
混ひを音ゐとゐ仮名ホ考索めく古語を解の助けとを毛とのり
○古事記日本紀に健と建弦と去村をすと去し記に蜈蚣と呉公紀に蜈と
危胴と同と去倫と者きて去せし立の一体とゐとゐ西土も古字多く
倫冠るとなくて一字のみて通用せしことあるホ同し
○新撰字鏡に訓のミを挙て音義を明るき字多し今の頽書ホ求得

さるとめも猶(ソコバク)多くこなまく勢ホよ収やゐ
石積ホ新字肥人書のごとみもわゐとを席ゐ
ゐひよ用来ゐる倭ホなゐべゐれと今世通用せゐホ除てホ書ホ収入ゐる
もホし

○倭名鈔ホなひと鶲とし鶲をあらそし鯵とをまちとし
鵤といかるとうとを踏とをゐのホ今のホ字書ホいそゐと
をそれとをゐ用られゐる崔禹錫ホ食経ホ引ゐる崔禹錫ホ食経の諸本仲祇韻書ホも引ゐホ
ゐや唐の崔禹錫ホ崔融ホみ関元中の中書舎人ホ魏書崔浩傳ホ
浩著食経とんでゐ明の焦竑ホ経籍志ホ崔氏食経十巻と出せるホつ
きを捨てゐるや

○彼字を淡て比字ゐおゐるせし一古今れ説同しかゐるも亦ゐれたゐ人ホ
日本紀ホ離讀てきゐれ倭名鈔ホ韓鳥淡てゐぎゐしゐゐ漢語抄をゐ引
て田島のごとをもホ亦同し日本紀ホ朩淡てえゐれ倭名鈔ホ楨淡てえ

とそるの如きは日本紀よろづ言にをゐて和名抄よろづ言に
本拠詳なりされど後の人無用和名鈔のようにて日本紀よろづ言
田よろづ言ひ鳥よろづ言ひしを創め造りてもぢくさぐさの名のおも
なる物の号ようにもてよろづ言ひて後の訛つたへを糺さゞるに似たり

○古書に用ゐる字今れ顔書をとりて正しかるべきの多かり杜とりて
と訓ずる日本紀新撰字鏡によろづ言葉集に神社をもりとよめりもり
い神のまもを取りて社地に斎ひ杜の樹とよめる神代紀によろづ言もり社
とこそうと訓ずるも日本紀に出でたる万葉集にこそとよめり社に諸
てこれ祈るれをなほ毛銭い秤銭しさる紙捫と同く用ゐてこれ縵と髪と同し
訓し幷に本挺也さる紙鉾と同くつつしむこととをれ例もまた既に日本紀に異まり椹字日本紀よむく境を捫に通用せり
江次第東鑑によろづ言葉大に異まり椹字日本紀よむく舊事紀なく
も風土記に臣木(オミノキ)と一姓氏にもてゐるみづきとよめりとて字書に求めて其義を得を捫をもぢと訓ずる舊事紀よむり後字

彙に椋の樹杪也とあり日本紀に挾抄者をもぢりとよめるも義同し
西土にも梢人梢工の称あり続日本紀に枠字をよみ古語拾遺にかせぎとよめり五音類聚に排の俗弄字と見えたり掠をくつとよむ舊
事紀姓氏録などにもてゐるり京をくつとよめり偬とおなじ
ぶと訓ずる万葉集によろづ言葉にくつとをれ義よりおなじ人と思ふの二合字なり搭をもりく
訓ずる延喜式によろづ言日本紀に弱木をもりくとあり若音弱の義をも
て二合せるなり万葉集にみづかきを楮垣ともよめるも弱木をこづ木といふり
据ゑるなり溝とみをとよみ妹をせとよみ樋をひとよみ掻をつばきとよみ
もまき式にもり摸をまきとよみ連をえつとよみ藉をうぐ
ひをとよみ蝸をてつつきとよみ嫌をうかりとよみ嫩をわかとよむい和名鈔にうそ
新撰字鏡に鮎を點をわゆとよみ鯉をのつとよむい和名鈔にうそ
是皆二合のを字書の正義なり倭をたをとよむい類聚国史に一
倭二并以上とよろづ言今も蝦夷島松前にて二并四并の倭を用ゐるとい人
も類書纂要に分倭倭散などよろづ言葉をとりて来襲

の称とする処倩とつくと訓るも二代實錄ふ宛字辨倩思義理とそう疑つくい猜字ゐれ誤るゑ猜い疑也とも測也とつくとそう勾ふらみとらるゑ藤敦光の詩ゑ當戸濃匂含霜媚とつくりふらよこゐ字詞ゑ音韻の差ゐりて芬者の謂乃とふつくとそえて韵の省文より謬まる歟」一又韻の古文均うて匀い均也と字出ゑとそう或い正字通ゑ皃本作皃卽古香字とそえとき此字ゐれ草変るゑ」こもつくり坪とつぐとよめるい和名鈔東鑑朝野群載ふ見えこそう字出ゑ平也とつくとよめるゑ如」一搏とくれと訓るい延喜式ふ見えこそう字出ゑ楚人謂圓為搏とそえゐけ義ゑよりるゑし又槫ふ紡ら字出ふ壁柱也とそえこそう二代実錄ふ歩板簀子槫搏とも出そう鞆いともちん」だの二名ゐりて一物し国俗の創造ゑ布とゐくと古事記日本紀なと出ゑれい古き韻出ゑおつれこそう繍ゐ綾字彙補ゑそえこそう真義とゐくこそう禪い日本紀ゑまも訓し倭名鈔ふ本朝式を引くちりめとよみ未詳とつくり今韻書を考ゑりよい字を収めを禪い本

朝式ふたそれとよめり倭名鈔ふ續齊諧記を引て音義未詳とつくり計字もまも字書ゑ収めを椙とをぎとゐむいお名伊勢物語ふ見えゐ槻の字ゐれ誤るゑ」一槻い日本紀ゑてそう闡とみくしとよこ靈籤乃とつくとそう字体ふりてそえわて訓せる歟」一絣の誤写とそう世ふ博雅三位等を改めて絣ふ作て用るい心得とつくとそえゑもまも疑」一棧字愚昧記江次第等ゑてそえく」一結之後棧令之其未只垂也とそえこそえまりとうひとうもんとそえと字書ゑてそえこそを或い機の誤写とそう獨い顔氏家訓ゑ獵化為猶とそえゐけ又ゐされ国史記錄ふ獵と通用を朝野群載陰陽道の部ふ籍十七棟とも筏漆棟とも又ゐ筏字字書ふ収めを見ゑみを知いかつくを芝とをぐと訓るい万葉集ふ見ゐ薬或い苓の差出を謬るとや倭とまくと訓るい古事記ゑみそう股と通るい古事記ゑみそう股と通るい文徳實錄の文干れ寅字多くかく出

て東鑑ふも肥前国三根西郷内ヲ延名と見ゆ或ハ刃ふ俗ともの
のり何の拠ありてをと世俗妄ふ改て遷て訓と用ゐ
その何の限りぬん今その記伝ふ出ずく著しきもの次挙て辨
をくのを

○倭字と称をその麻呂と磨ふ似る日本紀ふ出て後れ史伝多く
磨ふ化ともうさんと日本紀ふかゝる例ありくまく多く麻呂二字と用
られまい傳寫の誤ありてをと畠と云ひ類聚国史ふ鎮祭高
畠陵とゐてをり倭名抄ふ続捜神記と引をお書ふ白田二字ヲ又
畑とも云ひ火田と合しをあり万葉集ふ泉郎とあるい万葉集ふ
日本紀ふ白水郎三字をよめりさかき次榊と云ひ新撰字鏡日本後紀ふ
ゐてをり万葉集ふ神木二字ともめふよりとゝもに榛とをたをとゝもと
延喜式ふゐてをと和名抄ふ所出未詳といひり籠字万葉集ふ
ゐて鬘と同くかづらと訓を日本紀ふ縵ふ似まるを庶ふをたちとよ
むい儀式帳ふゐ寺ふ广と加へてかてをり放ち棔とあふらとをあるい土右

記ふゐ切韻ふ樸悪木也とゐてをりいをし牧翁と書ハ延喜式
ふゐてをりいてをと通す弱魚の義をぐ牧鳴と云ひ漢語抄ふなりり
鳩とふかとをむい新撰字鏡ふゐてをりいをし星皆二合して巻を反之枡と
とがとをむも字出ふ考得ずをり宋人茶詩ふ枡尾のをり日本東鑑ふ枡與梅通用と
ゐてをり元亨釈書ふも梅尾と出し湖海新聞にも梅為木母とのゐ
梅ふ同一説ふい神武紀の母木と二合しをりとをれと梅と枡
い形状大ふ実のり今れのふ木をものかりりとをれと杤と云
い東鑑ふゐてをり牧杤と書い和名抄ふ功程式を引て所出未
詳但功程式者修理算師山田福吉等所撰上也とりつゞけて
云も倭名抄ふ十字と挙て俗用辻字本文未詳とひ中山傳信録ふ
辻字一字両音国人讀為失汁とゐてをりとをろを笑ふまつと斯ら
うと難ゑえと難さらけと曜とをいひり、かをひと鋏と云い延喜式ふゐてをむと込と云い東鑑ふみ

えやがてと聽といへるは康富記にみえてふぐりと閛といへるは太秦牛祭文に
みえたり又蜷とになる娼とこそ叩とをいへりとしるは新撰字鏡に出
せり又神鳳抄に信濃國より鮭百五十尺同児一桶とみえて越中國より鮭
十五隻とみえ此鮭鮭の訓例詳ならず此餘やりの鑓といふことてめの之
と出れ数ありより枚擧にいとまあらざるを今たゞ和名にみえたるのみを出せり

○名物乃文字日本紀にあまを白水郎と云しつきの桃花鳥と書し
あるの巫鳥と云し万葉集に見えてきたる霍公と云しわせみと馬
醉木と云し倭名抄に田鳥とあるごとし海老とゑびとし鹿鳴草はぎ
ぎとし野老ところとし山薑又山葵をわさびとし水雲をもづくと
し神馬藻となのりそとし雉冠木とかへでとよめれ西土のいはざる出
る示とられたとへ古書に得ざる字の多かりそれより中にある風土記と
最どれ風土記の中に就て古代の本書とおぼしきは出雲風土記のごとく
その出せる草には説月牧葬離留菩加塩味葛ありまた播多年木
あり鳥には法吉鳥あり魚には朝鮐魊魚あり海物に鯐子ありかゝる

たぐひ今其徴をくはしくあらはすを又今俗称ある示れ山椒君仙子山帰来阿
煎薬秋明菊延命草海仁草耆婆三禮草白丁花沈丁花春蘭紫
蘭春菊紺菊仙翁花九蓋草土骨皮五八霜勝軍木水銀爐の類漢土の
名称に似て非るも亦少からず

○地名の字音を遂にあやまり倭名鈔に大内は於保宇知とし十市は
土保知とし置津を手木津とよめるの類も西土にも地名はその文字の音を
に変ずる事多し集韻に朝那は縣名朝追輸切音株朱提は縣名音殊
時須句は地名句音衢に枚挙に遑あらずといへり又山部の地名ごとより
鈔に山家とあり山部は桓武帝の御諱なる故をもて避しなるべし又本の字を
紀伊とし穂の郡を寶飫とよめれ是れ二字を用ゐ嘉名を取の例により
て響きの字を加添したる也

○倭名鈔郡郷の名に相楽をさがらかと設楽をしだらと餘綾をよろぎと物
理をもとろね訓覓をくゝきと益必をやけとしむるぬきは音の轉ぜるを
ろねなりとも又周淮をすゑとよむは本すゑ呉音なり杖部をはせつかべ従者

とゝむ平安をねがふ心より出たるなるべし二次とみよし雲須
とくもとる杵原とみてくもくゝもくゝもの興奏音如日訓とゐなめきは
いまゝ其義と詳ならず
○和字とゝいふ或い本拠ありて熟字とつくり或い正義あるゝ文字をも
て牽強附會しもてゆくゆゑとゝいふ色紙短尺艶書ふたり散乱の体とゝふも
出い源氏ゆゑとさゝれたの手一字つゝるゝ体とゝゆゑり葦手
放繪をゝりゝるゝなりわの部ふれ部ふ委ゝゝ記ゝぬみゝどゝいふ字
調ゝぬとゝゆゑどのむづきつのえびかりてゝゝなる仮名ゝもゝゝ
○我邦のゝ文字ゝゝ西土の文字と備て用と辨せりされい假字ゝゝ非と
れいゝゝゝ元来もゝゝ多ゝ梵漢の如きいえ來字とおとゐるゝゝり謝霊
運ゝ説ゝ胡字一音不得成語既不成語不得為物名要須字足然後可得名物
不牽他語足句則語不成皆隨其他語足其上字得也此間語或有名同而字

異ゝ字義同名得其語意者如食時求脯腊之脯木作時求斧鋸之斧隨言
而取得音改不謬矣於字時各有異形今胡書意不然皆字聲對無有共
聲通字者也とゐゝをとりて考へ徹ぬゝ
○事物の和語ゝ西土の音を轉用せゝるゝ多ゝゝされい韵学私言ふ若
夫華音則名称言語之間多依稀可原者如呼火曰奉則淺哼之噴也
叶音煩則如輕唇之飛七月流火是也水為飛土地為追屋亦近矣馬曰
謨麻魚曰伊沃華曰法拏木槿曰謨鼓檠沙糞皮曰沙乜海鰻曰法麼凡
蟬蝶銭盃之類亦皆以華音行語中須着之字者或謂之追則指事之
詞讀以字曰爾則能充治之義以辣曰葛剌酢曰数渋曰失歩酸曰謁
具之等皆習而不察者也ゝゝゝされと自ら相似ゝるも仍ゝ全れい
一概ゝい定めゝゝゝゝ
○西土の言語い多ゝ日本の云語ゝゝゝ方ゝありて彼方ゝ
ゐゝ彼邦ふゐゝゝ此邦ゝゐる紀ゐるゐゝゝゝゝゝゝゝ悪ゝ漢字ゝ読ゝゝ
ゝゝゝゝて古人もゐるゐゝゝゝ漢字ふ執ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○諸國ノ人ノ觀ル聽笛ヲ皆先用トイヒテ後ノ体トイフ然ルニ予ガ見ル所ハ之ニ異ナリ凡ソ西土ニモ先体後用アルコトハ勿論ナレドモ我邦ニモ先体後用アルモノアリ又大抵ガ後用ニアルモノ多シ然レドモ明人モ顚倒トイヘル如ク中山傳信錄ニモ實字居上虛字倒下逆讀語言未然トアルコトハ琉球モ日本ノ古法ヲ學ビシニヤ又今言トシテ古言ニ從ヒ倒語ノ如キヲ人ノ群鶴トイフガ如キヲ鶴群トイヒ万葉ノ古ヘニ立チ還ラシメンナドスルガ如キ西土ノ辭ヲ用ヒシ方ノアルヲモシ又水戸辭ヨクイヒ得テ細ニシテ淡カリ字音ヲ變ズルノミニテ我ガ國ノ語法ト變ルコトナク多ク和訓ノ如クニシテ西川氏ノ說ノ亞墨利加大洲ノ内ニアル唐土ノ言語ノ如ク韻律モ平上去入ノ四聲モ皆音訓乃至ハ和訓ノミニテ又地理形勢ヲ究ムルニ東方ノ最初ノ日本國ヨリ云々ノ天地發起ノ始メ四時中正ヲ得ルコトヨク我國語音ノ乃殊ニ勝ルヲ表ス國以二夏音一聞者獨日本耳ト云ヘルコトヲ多シ其天下万國ノ語音ヲ悉ク通ゼンコトヲ望ムヲモ半ハ當時崎陽ノ譯語ヲ驗ヲ用ヒンコトヲ

○傍假字平假字ヲ小漢字ヲ省ク文章變ズ　梵字難字朝鮮字蒙古字ヲ加ヘズ假字ヲ以テ表セリ然ルニ近來ノ人ノ中ニハ假字ヲ惡ミ漢字ヲ好ムノ弊アリ其ノ甚シキニ至テハ假字ヲ以テ源氏物語ノ草ノ假字ヲ書ルヲ又科斗書ノ如ク見做ス者モアリ又梵字ノ摩那ノ字ヲ那波多ノ字ヲモ知ラザルナリ

○書史會要ニ帝師巴思八采梵文創爲二国字一字母四十二ト云ヘル所謂蒙古字ニシテ其中ニ五字連續一ヲ成ス所ヲ悪ミ雲ヲ祈ルトイフ文ノ如キヲ我国字ノ如ク評シテ聯綴成字ト云ヘルニ至テハ中國詩文雖二不可讀一而筆勢縱横龍蛇飛動儼有二顚素之遺一トイヘルヲ

いろは假字といふ事なるべしいろは假字は草字の形を壞りて別に一体を立されはかくいふる也されといろは假字は弘法大師造まりといひ傳へたり元の巴思ハといふるかに前なれはをし摸倣しけんには彼より我に取しかへし旁假字は吉備公の造まりといひ傳へたり狹衣の草紙にかたかなとをて所紙出しまゐらせ也も漢字の偏傍を略取して別に一体を立たるをのしされは事林廣記に載する所の青楽の譜に字体の似たるものあるも省字を琴と撫するの法より從とノ治とム綽とト急とク吟とテ掃とヨ散とサ按とウとせり旁假名と相同しき紙をてゐへし又平假字と出雲かなといひ旁假字と大和かなと呼は其字紙造まる也を称するなん

○釈日本紀に假名の字は誰人の作る所を答大藏省御書の中肥人文字六七枚をかりあり其字皆假名を用う此をもて始とする歟といへり本朝書籍目録にも肥人書五巻と見ゆ今其傳を少す松下氏の説に今西国の人文字の異体を謂て肥後字を出といふといふ其は弘法より己前に假名乃字体はありしにやいふかし

○梵語を譯して漢語とし漢字紙譯して倭語とし其義一也よりて日本紀舊事紀などに此云或は此間云と注せし翻梵語の例によりまゐりよれ万葉集には反云とも出り其用られ多る假字も亦多く梵書翻譯の字を取まり婀愛耆曷哆囉唎咩爲元之二字連用られたるは阿提波陀ホ元之哆囉唎なとの字をさし口に从ふをのは陀羅尼の例上多れ字をそのよし大慧の大日經註に見えたりとそ大隅國囎唹郡のことにもまた元之

○疊字を重點とし俗にかくり字とも我より字ともいへり元とす筆といふ六書通夫字の條に見えたり假字出にくしと出は梵文の影像より出たり其字出にくしと出は全字の省文ゝと出は梵字長呼の点に當たりといへり西土の出に連ニ綿ヒ急又なとをちう後漢書の注に古書字當再讀者即於上字之下為小二字言此字當両度言之と見えたり上は上字の左辺を虧たるにや又は又字如へしといへり第に其て綿くなしと出は和漢同し

○日本紀にはなくしと波ゝ魯ゝと出古事記にこそなくしと許ゝ袁ゝ呂

ゝとも云賊盗律に祖父母父母を祖父ゝ母ゝとあり禁河の出にも木ゝ合ゝと
出て笏拍子と訓せり神楽歌に吉ゝ利ゝともみゆ同し意也出雲風土記
新撰字鏡にも皆此法見えたり西土に畳文とも重文ともいふ唐宋の人多
く用ふ明ゝ白ゝ奇ゝ怪ゝ洒ゝ落ゝ変ゝ化ゝ子ゝ孫ゝ珍ゝ重ゝ千ゝ
萬ゝなといふかことし出口氏の古事記を改めしは方竹杖と圓漆をさりしも
○世にひとつかきといふは條をかち目と云る所に一云ゝと掲出する類
いふ既に三代実録にみえて西土にも例ある事にて我邦の古法公式令に
みえて平出闕字凡二つのことは漢唐もさなりけん平出とは之を書して行頭に
在といひ闕字とは一字を闕て之を書をいふ今別に掲て書に一字あ
くるを一擡頭といひ二字あくるを二擡頭といふ陳眉公書蕉に魏晋儀
註写章表別起行頭者謂之跳出今曰擡頭と見えたり又闕字をも空
字といへり
○倭漢各成語あり先神代紀に晝夜をよるひるとよみ風雨をあめかせ
とよめるあり夫婦をめをと兄弟をおとゝえといふも亦同し和名鈔も縄

墨とをみなかしく訓せりされは吉凶をも禍福をもよしあしとよみ笠蓑
をも蓑笠をもみのかさといへるも是也
○古書に文字を用る正訓あり義訓あり梵語を譯するに正翻義翻
あるかごとし正訓は花をはな月をつきとよむ是也義訓は白銅鏡をますみ
のかゞみ神籬をひもろぎとよみ春草をわかくさ金山をあきやまとよ
むか如きそれか中に万葉集には殊に多くしてやうなるも多く千変万
化なりしといへり
○伊呂波の文字をもて書る万葉書といふは誤也それはかんなかきといふへし黒
白不分をあやめもわかすとよむの類万葉書といふと三條西殿の物語なりとき
貞徳か書に見えたりされと万葉集は書体の五六体にもなれり一様に拘
泥して説を立へからさるへし
○かなつかひと後世の事と云る説は大なる僻事也後世に至りて其法式
失ひ却て大にみたせり五十音及いろはは所謂かなつかひにあらすや又古
書とのみ徴とするはいふ字を以て別に一種の学と立るとのみあり杜撰といふ

一しきれハ古今集の同し文字なき歌に
よりてみえぬやすらんいつれおなりひとつりほとなりぬれ
此歌を唱ふるにえくと同音にきこゆれとてみえぬハみゆとえらけれハえなる
まなるくやすらんハ方の義なれハへなるすなへし 新勅撰集にも同し
文字なき歌
あふことよいまハかきりとおもひしれやゆくもあさこてもひそのえぬる
さも思ひしのの別けり同韻なれと同字にハわらす梅村載筆にハ古今集
此哥を挙て長嘯惺齋なとく辯へ得られさるよしおいへるハよく古書を
読さるの誤なるへし
○倭語に頭辞あり下河辺氏の説に歌にまくらことはといへるハ人の氏姓あ
るに同し古き歌のうけ侍かくおゆるハ多くハ枕詞と定るゆゑんといへり
歌のみならす日本紀古事記等に出せし神語又ハ神名にありて多くハ枕詞
あるなとて何となく幽玄にしてめてたくきこゆる也流れてハ世にあ
まてハ頭辞とのみく王ら不盡にかれる名となるも亦多しまた其後にしたら

ちはやふると母さし百しきと縦大宮とする類 野之水なれ鴨苑なれ明日香白なる
れ鷺坂山なとといふハ皆ハこしと一括之
○倭語に自然の連続ありて其用をなせりすて無名抄に歌ハたゝ同し
詞なれとつけからひかりにてよくもあしくもきこゆるなりといへり又詞の
連続なりにいふの轄換せしものあり同しことのついてとりあはすものによれ
なかれ世にもきこゆるかきれいとそなへてしもいかれかともいりあなといへるなり
といへるハ是也
○倭語に複詞多しつゐれ○れた○りよれかりぬのつし波し波あふそれう
み業々のひかりかのいかわまれそられ類を西土の文辞にも鄭重を厭ハ
ぬハ宋玉か賦に且為朝雲古楽府に暮不夜帰の類多し又体用級併せ
いふその例あり舞をまふ使をつかふれ等是也文語を添ていふものあり
みのや石見のやいせとれのまの類を西土にても于越句呉なとの于句ハ
發聲なりといへり又梵倭兼称するものあり護摩をたく閼伽の水これ
類なり韓和並挙るものありなれ川の類を

○歌詞に疊辞の格なりさひのくまひのくまはくわづくわづくみよしの
よし野去されハ木の木のくれ乃類之西土の詩にも亦かゝ得るその多し
○倭語に清濁通用するその多しいぶかしと言備とかける類之又えやハ
いづきれさしを茶ぶれの見ぞいこひし白川のこゞりにくむまで山城のとハ
まあひこんの類も亦志かなり
○倭語清濁によりて水炭相反するものなりたとへハみしハ見きこしと
きと通ひし故濁ハ不見之ざり反し也みるハ見る也すとるとあつり
すと濁ハ不見之ざる反す也みてハ見たまの急語之たまを反てこそ濁ハ
ハ不見ての義之されハ古今集の孫でも見ゆ孫でも見てゆ此所を下の孫で
もハ不寐乃義と先輩も釈せられたまハて文字濁りよまされハ通ひたとへ
庭の雪より我詠つけて出ふし故とハれにはりと人やみるらん雪
のうたそをじハかじと濁りよめハ狂所となるといひ
我おくろかくさわかしけ更科やれて拾山りてる月ぞみるく
此所もとまりれて文字と濁り唱ふまハ盲人の所となるといふるかゝしよく

分辨をへきにこれを著聞集にも蒔繪師の文にこのちまれかけてと云しは
御物蒔かけの義なるぞ子持娶かけの義とよみて狼藉の詞となりし故假
名はよみかしといふ事誤にとりしきるもといひ西土にもよみちがへし
ことぞ讀別字といひ白字とも見ゆ又本濁なり新濁なり本濁ハりと
より濁るへきといふ新濁ハ音便によりて濁るもあるぞいふ
○反語なり葦とよしといひ僧とかゝるがといふの類也爾雅注にも菫
葵本草言味甘而此云苦菫古人語倒猶耳草謂之大苦也とみてこり小
兒初生の時洗婆脉帯をきるぞ故なるその結を継といひ生髪をそるを髪
垂といふも反語をもてく祝せる也
○田舎ことばにハ濁音多しよて世諺にびるだちどんがうがにがへると
いふ皆訛言之大よそ倭語の發聲に濁音なし是たまく濁音に
唱ふる嶽とだけとし寄居虫とがうなとするかゝきハ皆後世轉訛のいふと
不なるべし
○四国にくだかりをだものといひ美濃二河にくさ海をさとのといふハ略

音ゝ三河ゝくんずをうんどりんずなゆうどといふも
同ゝ又をうゝくの何事をいふもとらふまいらと後ふつゝく朝鮮音よ南無阿弥陀佛をのゝみとよること
いふめり
○田舎訛いだみてはうゝ紙俗よるまことのり拾芥集よ
あつまあそ言れをかくのみ古なみくさをものはいひそれ
とうとてうゝ万葉集古今集ふも東歌の部をとてうゝその何音韻相通ふ
てい解得ゝさゝ又玉葉抄ゝ
當いかゞされ菓ふそそぐそもだみそる音をはゞめしゝり
とうとそれと関東ゝ當い甚音実よだみてうゝされい世よ大和の當ゝ山乃産
とりゝく甚音を賞やうゝ又ふよつ○月日星と俗當も神路の山をそへひつ
きかゝーとふけるといひ又西土の當ゝ大よ実まてうゝとものふゝされい該當の
音よ到りても風土ふゝりて変まてるをや
○倭語ふ略音ゝり痛をめてうゝ上略してをはをてふそゝいふ

中略しおまをおとうゝいふ下略ゝとうゝ西土も亦同ゝ顔師古も本言何等
物甚後遂省促言甚云等物爾といふり
○万葉集よ訓をい多くゝ下の言とを用うたなゝいトゝら市とち圓とろ臣と
ゝ相とふ麻とさ生とふそともむのむ推て知べゝ○磐金をそれ高脚をた
かゝーとともむいもものもゝいいの音ゝ散をとらゝ過去ゝ此の音ゝのゝり
まゝとともむいきもものもゝいいの音ゝとゝるをとてしけも赤多ゝ
○ゆとうもみとらふ湯桶の字訓ゝ字ふ音なるをゝり中古以下く
ほもまゝ多ゝ文字ゝみとうふ石竹といゝたけ海松とみまろ龍眼を
たつのめ龍膽草とたつのいぐさとみ小角ゝらでのふえなゝ紙とろのみ
えゝとみ虎耳ふゆきのもさなゝとらのみゝとみ知風草ふちりぐさ
なゝをつぎもりぐさとともむの類そし物乃名よいと多ゝ又硬を有ふ足
る名ゝとみ来とうもよふ本ゝとゝでない析字ゝ名目ゝて西土ふもいそゝも
○言語の古今ゝるふ日本紀万葉集乃詞今と大ふ変まりまゝ詠歌大
概よ詞ふ二代集よ出へりゝとゝれと古今集の詞とゝも好ゝよ

むまじきゆりともいへり口絶も又同しきまや徒然草に古人は車を
こげよ火かこげよとこそいひしとをてあげよかきあげよといふにとし
とそりてあ反たきあ反かなれは緩急の実相がら古今の雅俗にはしたり
貴賤の詞もまた同しとて清少納言もげを此詞には必ずをじしあまり志
こりといへり謝在杭も稱謂有質於古而増於今者陋可知也といへりげに
とおぼえ侍る

○言語を方俗あるは和名抄郷名に蓁原をたいだらともたゞけらとも
たりけらともたんだらともたろぴらともよみ榛名をたるなとよみ又邑
楽おけしは邑義ゆふみ邑知おかちとよめる故をて知ず 歯齋九州道記に
　おまさかるひなまは狩り居るむかしのどろこも打敷し浮世なれども
九州の方言をよめる也又かりをるるといふは後を制する詞なせかりをる
といふは今を咎むる詞なる故上総すてはかりをるなといふ故なせかりをる
といふは語脉の実也又土佐辞とよめる長曽我部乃今に
　けるしとちふはいつらかゑどらしやぜおやうちやうちくよんべきこちく

けるしをこれくと人を呼んちふはこいふんまこちは吾子等なんゑどらしや
はいやはかりふんきついるを忍ぞいといへりぜおやうは想体といふ詞世上
まや志やうちくは精尽るまて事に僕といふよんべは昨夜えきこちくは来さ
といふえちくはちふは特にて毎々語助につけていふん又阿波辞とよめる所
　うらがくにぎやうに咲る梅のむ故やまけうれ忍ぞなやまかせ
うらは我えぎやうには仰にて仰山の略なるへし故やまは訝る辞けうと
なは意しにとゝへり又雑波人の尾張の口読とよめる程所
　かつてこいさまをがおりがひおりがいことなるに阿ぞにそふでやうふでや
かつてこいはかつて来まえさまをがは何しにといたんがぬしおぞがひは忍ろし
き故いふかぞいことは不好事といふなるは初めんあらぞまはあらふぞるに
そうぞやかうぞやはそうじやかうじやの特語えとそ又若狭の方言は童謡
ようぎやひとんとおもやうをけまでぶらろ抱ひたり称てといふ
ひとふと故為に錯言しうともしと分辨せず伯耆もひとふとを取
遠へり東をふがし懐をひところの類也又豊後辞の所に

きのふかんちかえきてふかんをひっくらしいよ二日とかえどふどうどうどうをやう
ちかえてくきふかれてみんなひかみねさんてくいしいいくやしきん
うどうハ我をいふどうをやうハ何とをやう也又
おれもこつをかむひハすれどうをぞろつひよ何ほどをんきなるかや
こつをうハ我をしいおもひハ思ひしをうろハをやうぞんおつえどハ愛宕
ぬくしなんじやつまハなんとせん也又信濃のをづのめっ路の桜とつんくよ
めかとろ

いきろをまんつがせむのきろちぬよぶこつこしさうて行けとどられかいば
いきろちぬハ往来なんきろちぬハ来りをなしぐまらりとさうてハ答こたか
むのはく開く我いふてとけとどられかバとハ此ぬてくり花桶ハ箍と用ねを
桜はとのくとうちたうん四国も同し又奥州の方言とよめっ

いぐひさや初音ぶんだせきくべいよわせいかっれいぶをさだんべい
鶯の初音と出せやすべきれなぜ啼ぬぞぶをとをやといふ意とし又琉球
ふまて祝賀の初めふうとふ方

けふのふくらしやなふもかなたちよろつぶてとろえれもれゆぎやぃのたくと
琉球の方ハ春正の詩とといへり春正ハ大納言資慶卿の門人也けふ乃
ふくらしやハ今日れ福らしきてなりもかなたちよろハ何よ喩よつぞれ
琉語也つぶそ皺なるのハ蕾んで居るものくつゆぎやぃたくとハ露に
りあてさあく此我行達るとをふもゆきやんなどいふとぞ又蝦夷語れ方とる

びろをやりしいもののもうげとのころして妻の肉よちろぷかんてきう
びろしやハ褒よる詞かもののもうげハ美女子の体をところしてハ熟睡とふ
ちろぷハ舟也といへり又伊勢桜と伊勢よて浜ほ桜といひ江戸桜は江
戸よて吊燈桜とよぶの類も亦をれぞれよすて云歌よ

草の名もところによりてかはるなり
難波のあしもいせの浜荻

といふ句よ救済法師
とこそへ付られ西土よても山海經に海外西南人以蟲為蛇號蛇為魚
といひ病源候論よ呉音呼藥為菽といふぬきれをかしきをんく

○處所の名ハ音にも訓にも人家に多しそが中に多武峯と談峯
とかしハ多武の音と談一字を用ゐしかバ供僧ハおのづから談山と音によむ
さる故後にハかの山ひやうもあり二荒山ハそのあざやかなるを音
とよびしより近世美字を擇て用ゐて日光山と称せり比叡ハ日吉の
假字なりしを日吉とひえしと唱へしより一山の名と社地と佛場と分かつ
○同字同義にても唱へさまにてその本地を異にするあり鈴と音にまろく
すゞといへバおのづから訓にてすゞといへバ振一千柄を音にかんぶつといへバ精
進の名訓にてかうのもといへバ菓類の称也木綿ハ音にて呼へバ布の名訓なり
すべてこの道御門も音にてハ上下通称なるべく訓にてみかどと呼へバ天子を
称し言上をごんじやうといへバ重くあげしあぐるとよめバ軽し奏
も啓も皆まうすとよめバ音によみて訓によまざれバ大に尊卑の別ちあり
和じん清わも亦同し無念とむねんとよみてぶねんとよみて漢音呉音
まで字にてかぎり書物を音に呼と訓によみてあさきといふて大小の別あり
石灰を訓によんハ字ハいてして唐音にてしつくいと呼べき事を異に

す又女官とみなくもんもじひかりもんもじ御臺所をみだいどこ
ろともおだいところともよむ直綴をぢきとつ
ぢきとくとも頭巾をづきんともときんとも脚布をきやふきやふとも
よみふるき名をよぶ人多けれバそれも亦多し
○物の名においても祝賀の辞とする我邦殊に盛也されば中にふくさ
と冨貴といひがなと冥加ともおもふくよりなへのし麪を樂しわ義
にとりて昆布の名を弘めの辞によそへ今上下をしめしそれぞれもげに
言霊のさきはふ国のならひなりけしそれ我邦のこともの事におしとる
土にも略似たる事ありて一切の祝義に万年青(オモト)を用ゐる事花鏡につまびらか
又春盤と蓬莱と称し松栢の常盤木をかざり榜と堅盤の言れあ
りしせ橘を立る物の佳名によるところハ燕朝樂事に正月朔日簽栢枝於柿
餅以大橘承之謂之百事大吉のおくる又齒固めのをとらんハ荊楚歳時記
に元日食膠牙餳取膠固之義のおく又除夜乃戸開本重ニの母子草誕
生七夜の金頭の魚ハ増續韻府に社日傺葱蒜取小兒聰明計算之義と

いそがしく又春日の鹿ハ鹿嶋の名ヲ出箱荷の狐ハ三狐神ホドロめきい
西陽雜俎ニ獺者不殺豺以財為同聲と記せるニ近し又人家ニ芭蕉
とうゑたる梵書ニ此身如芭蕉とうたへるまゝより西行モ又
宝永仙と人家ニ独ヲとゑむとうたへるも元義草の名よりとりし食ニ香
ねときれを供ニさるハ甲者身斬の名といむ西土ホドも桃ニつとゑホあて又
ず二刀二士を殺をの義よりとりし又大法れよりし波のごみやうれーう
そぶと歪うてかりてろろぶの義出陣帰陣左用うしとうたゑみ
うたの幕とうたゑいひ敵の幕とうまりとうたゑみやうあへのことをよ猿毛
の馬ホ空へかりとりし又弓二張と人ニ考を見録ホ弓一張張矛一張を
玄ハ二張の弓をひとうたゑと嫌ふよりも
○古人談云助語の点ハ初より字ハ四週ニ朱点をさしたりそと点ホとも
てり源氏物語ニ人ニ点つけざるもの多しかせーとの多も朱点をとうたゑみやく
いさう褒貶ーうるさとうたりう
○右の談注をあけて紙ニかとうたゑ点ハ多き内の首をとりてくふうたゑ四

十七字ホ歌をいろはとのふやー
○そたとうたゑ右ニとゑ左ホ左ホ平上去入の点法のやく
みて四隅を左旋りよりもとうたゑそたとうたゑとも博士家より出く教学者の云
ふやうにするとうたゑいなもそたとうたゑとうたゑもとうた辞のつゞくる或ハ
説ニ出薬の名とり多ハ腹を捧ゆへー
○てふとハ乃所詮ハ切と続くれ二ホし文章の句讀のごやーうそれとう
るれ翔のやく舟の梶乃やーるハ翔とをとてる天ニより舟ハ梶とりく海路
と渡くニ有ハそれとゑみく千変万化すとうたり
○萬葉集詠霍公鳥歌の下ニ毛能波氏ホ乎六箇辞闕そこうたりう
助語多くていろみうそれとをとてかくニ注せり是所謂そたとうたゑの原始なり
かつ多のとまりにけ云の辞ありそれハ皆学上一反るニ依うたりう又和語多く
助辞をりく幸を辞一うりうそ古今集ニ

白浜のわとるたとうたゑ船も見うたりれもるへるりをり
（十余も文字一つうそ之の多とるもとうたゑとうたりう又昔の歌ハそれとうたゑ字

多く新古今集れ時分よりみくなまりともいへり
○てゝ此ハ過去未来現在及下知ハ過去ハ已往之未来ハ將来
之現在ハ當今之下知ハ命令之なるへもゆきしきたるもしハ過去れ辞
ゆりんきたらんハ未来れ辞ゆくきたるハ現在の辞ゆけきたれハ下知
の辞なるの類也
○讀書の法古へより音訓を兼用たりよて句投のかなをこと点と
いふなを立たりし倭語ハ漢字を填るれ法もまた必をしも音のミ
をとりて日本紀以下皆然ありて今用ふ傍例字平假字とも云
音訓を新へて通用するものなり
○世に傳ふる所の参河前司清原教隆り点なるを考ふるに紀傳經
典の実四聲音訓の別なり又切点懸点及点の法及呉音漢音訓
の引合といふなりたり釋氏法宗れぬきハ点法區々にして一例なるを
○當時の点法一二三上中下甲乙丙丁等れ字を旁註し錯へ讀く
文字を通せり之を返り点といへり又直讀をべれ所にハしの字或

用ゐ反讀をへきに所にハしれ字を用ゐたりしハ説文ハ音衮上下通也と
見えたり之を旁抹中抹なといへて抹の義にあらはしハ乙の省文にて
文字倒置をるゝぬきハ當乙といへるそれ宋学士も我邦の讀法を評し
て順文讀下復逆讀而止始為句といへり
○一字再讀のものハ未といまた何くせどとよみ將をまさに何くとすと
よみ須をすべからく何くすべし猶をなか何くれどとしとよむの類也
かならざれば倭語のまゝ居たる故をそれ蓋ハ何くとより何不二合なれハなん
ぞとしよみ無て句の管到をるにより何くざるとよみかへるハ和語の法之
諸ハ之乎也と注せり句中に何りてハ之を何くとよみ語末にありてハこれ
を何くかとよむも同し通志略にハ諸者與二合の音者與切音諸慢聲
を者與とし急聲を諸とを者ハ此也與ハ歟に同し可忽諸ハ可忽此歟の
義とをまた旃も者為二合の音之といへり又大江朝綱の和註切韻に返讀
字と題し須宜盍當將令使教遣猶縦未の十二字ハ収めたり
○半濁にハ一圏し濁音にハ二点をるを俗に濁りをさをといふ四聲を点

すゝ法のかし四字をとりつゝを点發といひ又沒音は本濁新濁のけらあり
ありまへにもいへり
○今の点法は実は旁註をよそて中山傳信録にも得中國書多用鉤挑旁記逐句倒讀といへりされと古へ星を点せし時の名を存して点といふ事の
は今れ冊子に点の巻乃名あるかなし西土の点法は圓と圈点といふ白圈
あり黒圈あり重圈あり白を批点といひ塗抹を抹点といへり
○古今集れ序に分にはあさかの山のふゝ歌は歌のちくれやうまそり
てなくふ人のそしめにもしけるといへり雅波津の所は王仁かよみ安積山の
所は采女かよみて王仁は異国の人采女は賤官の女にそさへかゝ優美れ
すさみあり此れは生とし生けるものは皆云れ然ありこれ紫姫は花の
つかゝ花も咲出ぬへき理りなるとりて此ふゝ所をもてく父母乃庭
の訓とし学ひ知るひなはいつ事の所をよますしもあらんとの意なり
源氏物語にもなにはとだにそなべ志うつゞけ給ふべめ事はかひなく
なんとはんて清少納言にも御すゞ事を知るしてとくくたゞ知りひまれ

さぞなにはつも何もふとかなへんことをとせめたまふにとはんてこれは西土れ
上大人丘乙巳化三千れぬくとさなきは字を学ふれ始とし名は時乃
なりけり見つゝし猥談にも上大と載て不知何起今小児学書者必
首此天下同然といへりさるを今の代は老後抑しなへて四十七字れいろは
と教へぬるそなはるけれいろはは涅槃經諸行無常の四句の偈を譯し
て同字なし此事はよみなし七字つゝ句ぎりして陀羅尼にならん人
ぬ顔字にとかなくてしすと無るも偈の意なし是は弘法の先徳を
尊ひるものなし五十音のいふ元と省きて歌の詞に属り四十七言をも
て假字つゝのひを示せるは古今独歩の妙能十字文の及ぶ所にあらぞ
されと世の人を教ふるの法としかくし古今集に同し文字なれ歌も
何をとたく浮世れさ海をのへて一事に偏し雅波津のいとめてたく安積
山のなさけふるれたらひに能すとて其代には此二所をそそ手ならふ始
めともなしこりけんさて我邦にて古今に渉り四方に通してそのな
らふ始めの法と定むへきは五十音に志くはなかるへしいつまのなるもか

なりとて取ふ随て其用とるせり倭語をあつく摸範訓義とさ
いくれ規矩他に求むべきものふかすてたよこれを我て略を挙との
あるものなり
○歌辞及物語ふ文字に古て其訓を取用ひ其字のそこ〳〵く誤よ
りて後ふのち紙副ふい通例也さる間ふ多案葉を破夫利部夜故葛西
多架葉よ思嘗保湯留なとの類ハ又一体也夫字夜字賞字旬くて
もとそれ思ふまを
○韵學私言曰吾邦舊傳五音十母圖實古来韻學之権輿日用言語之楷範也為字纔四十有餘而人能極其微盡其蘊則宇内之声音経耳即可得其情至約而備衆法至簡而應萬變殆乎臻妙入神之作其有功於人世亦大矣郑夾漈所謂婆羅門書以十四字貫一切音字海所云王斗十字蓋皆指此也
○五音十行の歌
アワヤ喉カ牙サ齶タナラ舌ハ輕ニ重く唇の音

音韻相通假字攷圖

喉	ア	イヤ井	ウ	イ	ウ井	エ	イエ井	ヲ	イヨ井	
牙	カ	キヤ井	ク	キ	ク井	ケ	キエ井	コ	キヨ井	
齶	サ	シヤ井	ス	シ	ス井	セ	シエ井	ソ	シヨ井	
舌	タ	チヤ井	ツ	チ	ツ井	テ	チエ井	ト	チヨ井	
舌	ナ	ニヤ井	ヌ	ニ	ヌ井	子	ニエ井	ノ	ニヨ井	
唇	ハ	ヒヤ井	フ	ヒ	フ井	ヘ	ヒエ井	ホ	ヒヨ井	
唇	マ	ミヤ井	ム	ミ	ム井	メ	ミエ井	モ	ミヨ井	
喉	ヤ	イヤ井	ユ	イ	ユ井	エ	イエ井	ヨ	イヨ井	
舌	ラ	リヤ井	ル	リ	ル井	レ	リエ井	ロ	リヨ井	
喉	ワ	井ヤ井	ウ	井イ	ウ井	井エ	ウエ	オ	井ヨ井	
		ウヤ		ウイ		ウエ		ウオ		

此五位十行の図ハ吉備公の作と云傳へ悉曇金剛文珠問ニ本つくといへ
ヨ唯五十字をもて天下古今の邑韻を包括せり五音七音のまいたゝめ
開合清濁の詳なるものハ学ニ専門ニ成り此書倭語を解をまいたゝ要
領をたゞ記をのゝ

○竪を音とし横を韻とす同音相通同韻相通といふ是をあいう
えを等れ五十字ハ正音也是を直音とはその下にいやうまにを記をハ正
音の少しひきみて変せる也是を拗音（イヤウ）とはそまる中ニ右の方にいやいい
なるゆゑハ開の拗音たの方にうまうねなるゆゑハ合の拗音にあかさたな
ゆゑやらまを根本の音とす各二三の音をすぐとすて第二のいきしちに
ひみいまねを右の方になる人第三のうくすつぬふむゆるうをたの方に
なる人其右の下にやいゆえよを並たの下にまねうゑれを並り喉音に三
行を立たるもかゝる訣ありさて是をもて一切の假字をかへて法を知し
よて此図を假字反と名つけ為をといへり

○悉曇ニハ南天を直音とし中天を拗音とす南天ハ呉音なれ中天

ハ漢音のかしといへり悉曇藏にも中天之音多用漢音少用呉音南
天之音多用呉音少用漢音といひ韻會に韻書始于江左本是呉音
也とあゆ五十音も直音をもて本とするハ此義なし

○假字反の法反をべき二字の図上を父字とし下を母字とす二字同韻
なるハ父字に帰し二字同音なるハ母字に帰す是を横帰本竪留末
をいふきえ反けしか反さの類ハ父字同音の上か下かにて母字同韻なり
あらる字を帰字とは是を父字ハ上下母字の横といふといへり

○あいうえをの五位を字母とはよて餘りの四十五位の音を引て呼ハ
皆あいうえをの音をすはあいうえをの音ハ本韻ハ外を出す古事神
武紀の歌乃阿阿の下に音引と注せしを是をあかさたなはまやらを
れ十位ハ皆あ乃音を生しいきしちにひみいまねの十位ハ皆いの音を
生すうえを三の横行も亦同義也倭名鈔に末ハ丞を紀伊とし龍
ハ郡を囎唹とし火の石を肥伊とし雄の石を呼唹とするか如きを是
あるりハいうえを生しかりハきくけこを生す餘りの行皆同しを第一

行のあいうえおとより出て又なのあいうえおに収る者ごとく近世れ文字鎖
ふもとりるところの文字をくつけてさき着れあいうえおとつくることを
習ふにさておろさなるそもやらとれ十位の五音れ首ふ居て開音たり
そと男女と称をいうえおとの四の拗行い皆合音うりそを女あと称
す大日経義釋ふ従生増加之字悉是女聲甚根本字是男聲ゆえふ
仙覚の万葉抄ふ天とあまと呼ふ女あと説るふそを
○五十音の内いうえおの二音各二つ宛ありて実ふ四十七音ごこふ華厳乃
字母両阿藏のめーまて千載集れ序ふも四七字ごされ序ふも四七字ごとり
いろはの歌もまた四十七字ごされ宝船入宋せーむふ字母僅ふ四十七よい
ひー書史會要ふ見えとり涅槃経ふの字母五十字ごされ西域記莊厳
経ふごふ四十七言とりふめーめー阿蘭陀も四十八字とりて通用をと
りり
○いうえれ二つ母字まて兼用ありてもうにのりふいえ
おりうえおをいうえおとの行ふ収むゆふかうふいえいやいゆえよれ行

ふ収むあいうえおれうい狭く出る音訓乃頭ふ用るをこをおう系ふ
乃うい音訓乃尾ふつうふきこうこをおきうこをおあるやの喉音を首尾と
中とれ配當せりとりり
○あいうえおれ五字とかさたなはまやらとの九字と合して十四音ん
五字を韻とし九字をあとして二十六字とをゆる系統生所生
合して五十音とるるこ五十音ハ十四音名曰字本とも法りとりりれ
四音を加えて涅槃経ふも十
説を正とれ悉曇藏ふ見えて倭音とい別こともりり
○五十字音ハ十四音ふ攝して十四音ハあいうえおとの五韻ふ収り五
韻もこすべてあの一韻ふ帰せりれ凡人の口と宛きて音をはる始めい
必すあの音乃りあい一切衆韻の本源言語れ根基こして人れ初く
生れ出く發をるをもまおとりりまた神代ふ諸神の二号唱和の洞
ふもあるふやーと宣ひーをう聲韻言語の始めるりくふ大日経疏ふも
若無阿聲在郎不開口亦自無音言也ごも阿字遍一切字若无阿字則字

不成ともみえたり

○五十音あれの二音首尾をなして来を結ぶの和語なし口語のまあやあの類は音の音きえよりてかさたなはまやらはのかはいふあの音はすべて唱へ寸高天原をたかまれはらといひ磐余をいはれといふの類見つべし地名の我おそおも同しさらは我そをとなる人を和名鈔に呼唹贈唹とありとをに口に従ふ上変れ字を用ゐたり呼唹は和泉の口名にて二字合せて我の一言によみしは日本紀に雄とありしに和なれと二字我用ゐるは例によれり嚕唹は大隅の郡名にてそなたによみしは日本紀に聾とありしに和なりき彼地の変上になまりて来れはにやあらん此二ツの外にはなきをもて知ぬべし

○らりるれろの五音には和語の發変なし此行の音にては語のつまる我をて知べし梵学にて此五音を入おのことなるにあらるも漢土の変音ふつくちきの五ツにてつまるかぬしよりて五音とりて助語に多くそんていひ万葉に大かた在省又所の字を用ゐたり組不解在牟春无省来君相有香聞

言有者香不所宿の類見えしといひ又神代紀にもうめるに所生りたるり所持のまれんに被吾又見吾と出たり

○あいうえとの韻となる字下にあるは約め詞多し万葉集に吉野尓在と出てよしれなると頭にはあ反なし雪消と出てゆきけとよむはきえ反けえくぬちとよみて國中をいへるにはふう反ぬなるゆゑ也をかたありとも少なかるべしといひり

○あいうえとは同行又和行とは通りしいふもあまたて次の八行とは相通りて和の行はあの行乃特音なれは通りしいふもありて我の音のみ他にも通ひ助辞にも多く用ると和の行れ尾のおは言れ上に乃えいふ音なる我にてに在とを對へ見えは我れの二ツを相兼し始終の末に置たるはよしありぬべしといひり

○倭人應對の変もまた皆あいうえとに出べ又字は色音の根源なるがゆゑ也あと答ふるは禁秘抄に見えて今あてといひあいといふは言詳なる也水南翰記に諸司官御前に兼旨皆曰阿其色引長と見えたりない孫いれ音

よゆうるハ何いの將訛せるくいハ漢出の法ハ唯〻といふとよむも字音ハあらず倭語の答へ老子ハ唯與阿相去幾何矣註ハ唯阿皆諾也といひ梵書ハ禮對曰唯野對曰阿ともあるとうといふハ下さ處へ答ふる辞なり治拾遺ハむといふ人とあゆ今んの音れことし領兼しうる語ハ元ハ如ゆうる事ハいへりやともよとも呼ハやいゆえすに將しうるくされと阿波の國人ハ應ずる詞ハえてといへりとも兼諾の詞ハ源氏物語にもあるより古今著聞集に人のめをハ男ハよとまうし女ハをとやすといへり因則ハ男唯女俞といふ如し故ハ源氏抜草紙ハ見えて日本紀ハ唯〻とよめり口語ハ下ハいふ詞なれと今も薩摩人ハ上さる人ハ答ふる故といへり式文ハ称唯とあるも多く上さまハ諾するといへり世俗淺深秘抄ハ称唯時塞口警蹕時開口也とあるも故ハ唱ふる口つき故いふまや今加賀人ハ敬む答ハいてといふ関東まてハなつといへり

○かさたな四ツの行ハ濁音なり　そか中ハなひふへかの一行ハ半濁の音あり餘りハなし

○岡部氏の説ハかさたハ此四行の濁音ハかきくけこをらりるれろりていへるハ刺故いかといふハ苛といらといふハ同しうからとうらつと通ひ濁を垂といふ事なり振と古人ふきといへり味の忍ぐきハ物と鐫が如くなまハ忍ぐと忍るかなり折とへぐといひ減とへるといふゆげとゆまとかけとかれと凝とこごしなともころしきとも我をまごともまろともいふなしすせそ故なにぬ○のりくいへるといふ○といふ○といふ○ともいふ○ずをみぬをせとなる○とこせとこ○とのあるたちつてとも亦なにぬ○の小通りしいふハ鍛とかしといふハかなしの義隔ちと万なふ葉ハ○なりともいひ瑞とミづとみぬとも鐸とぬでともぬ神とも罵辞ハかのまをれどまをのくく故かどくといつしたひふへかとまみむめもまそいふハ日本紀の所ハ婆と出へき故麻麼磨なと填なり神なひを神なみかつりとかむりすべらぎ故すめらぎひが故ひもなと通りしいふも数ふ蚤かしど文字ハそも馬美武米母と呉音ハまみむめも漢音ハそいぞび姫べがとと儺尼努祢廼も呉音ハそいなにぬ祢の漢音ハそいだぢづでどと

す廼ハどゝの小用ゐたり泥と称とて用ゐ鳥をうを我に用ゐるの類ひ
といへり
○あいうえをの行をゐうゑおの行首尾に居て活用する時ハ假字づかひ
多をひふへかれ行に帰せりたゞ人ハあの行と遇りていふにあたんあひ阿ふ
あへとをたゝらけり　その行と詰りていふにこたんこひこふこへとをたゝらぬ也
○假字つゞひの大事たゞ喉音にあり一切の音喉音をなしたれハ通雅
に外國喉音特多しといひ五音皆宮に統るも亦此所以なり也
○をひふへかの五音訓の中と下とに互ては皆をゐうゑおの音によへり
をハ反をゐひ反ゐなるゆゑくくふへかも同し伊呂波の四十七字も此二行
相かゝふ使やう我知しめたる者ハ且あいうえをの行をゐうゑおの行と紛
れ易しとてをゐうゑおを五字の類と五類とをたゝて假字れ分ち唯二
の五類と肝要とせり
○いゐえゑをれの二對六字ありとより輕重同しかゝるをまた相通へる
例なし南朝の明魏法師ハいゐえゑをおのたぐひ皆通して出へきし

といへり　そハ通とゝなく別を知らさるゝ別ゆゑに通の名もあり先
別を能知りて通をかゝる用へし通別相まちて互に用をなせりといへり
○いえをハ開の輕に用ゐたりゐゑおハ合の音さに用ゐたりされハ假
字使ハ早竟音の輕重開合より自然に分まてるなり也といへり
○訓の中ゆゑてきにかゝふへきにハ皆いを出ゆゑにかゝふへきにハ皆ひを
出へし又ゆにかゝふにハえをもちゐひにかゝふにハへを用ゐる也又よみの音
をうにしてきとくとむとみにかゝふにハうを出へしとひとにかゝふに及
入変字れ音の下ハふを出へしといへり
○志ちすつの濁音紛れ易し古例と訓義と我辨て出し妄にすべからを
○出雲人ハをひふへかの音を重くふをふゐふうふゑふおと聞ゆ平
家とふゑいけ半分をふるんぶんといふ類ハ安藝人ハくるといふるを凡
てかといへり関東をかんとう一毋をいつかんの類ハ江戸も観音をかんかん
といへり志摩の田安乗の俗ハ阿の音皆ことなる綿をあたゝ渡るをあた
なのあたゝ上総の田れ南乃方の人ハかきくけこを得いをて皆をゐう

ゑれは物を百六をひやうろうと唱へ百二百をひやうにひやうといふうに
詞をりて字ゆ房州も同し笛を物くをふりたゝくをたゝあといひ
さけをさえといふ又ゑをゑとゑへらりなまろも正音なれはかゝる事
玉くに多のりも魏都賦に音有楚夏者土風之乖也といへり
○詞の行と和の行とは首尾に居てゐ通ずるか中に織絢をありさぬとよ
み愛宕をあたごともいひ戦慄をゑのゝくともゑゝくともよ
み誘をいのぼるともゑこつるも婦人をたをやめともたをやめも撓を
とゑともたまくともいへは叶をゑめくともいへは隅違ふ通ずるなり
阿母をおもをさを曰佐をおすも亦同し梵に羅文といふるかゆし犬とい
ねともゑねともいひ息をいきともゐきともいひ居をゑるともゐるともいひ
はゐ通ずるは詞をて別の義なるもやゆ但しともに喉音なれは能生を所生り
をさかてしいふ梵云れ例と同しきなり
○あとかとは諸音の中に殊に志すくかゝんをて日本紀私記に輕皇
子を阿留皇子と云倭名抄に筑前の志加を志阿と載せ無之集に詞をと

ゑんをと詞ゑは古帖にかゝれとみるとゆかのをあのといひかををあをといひ
ゐをゑはゐをゑもいふありいうえゑきくけこをも亦同し
○おにとはいかりいへは怒きゆゑにおにしゝをにの志てくさといふ時は粗きゆゑ
に毛と云おろしに常すれはみやはゑろしは粗きをりてをれ俗名を用
ゐる云つて云時に荒をとりに荷をとりなるとは我の俗名なることを
いふおは荒くをんなといふをは粗しをて文字をかつは誤成一先は和漢
の四義を文字をそは鬼はいつをとうをもおにしをおろしは下字を
よりは同しおにはおにはみをとゑをとの俗なく男女ともをの俗
名成一又おかつといふ時は平声おかは野といふ
時は去おかをさりをそおの字を加へて我と云れ例はあるを
○歌に上に云そといふは下必寸第二の韻をそとをる上に云そ
下必を第四乃韻をそこまは自然のゆなるへしこれかそをつるを志
きをしにしてをさへこそといふに志のみらしをそをさあれ我のを
○第二第四の韻より通ずるく辞の特用は皆俗言をことを雅言に

ハ皆第三乃韻より清くるんたゝ人ぞ荒ぶるをあらびる浴るをあ
びる生るをいきる又たゞるをたゞる受くる紙うける載する紙のせる建
つる紙たてる菓わる紙かゝる屈むるをかゝめる沍ゆる紙さえる流るを
なゝまゝるすと乃韻迄古今に岑まれてもゝ時爲のあめれそめるんなり
其ゝ何るハ染有延有の義にて染之延之のまゝにあらず孫ハ別之といへり
○正しき假字也ハ訴とうたへ全とまゝたく当をもつくと出てつ字を
出す入邑のつハ喉の内にありて外にあらはれされハ之といへりこゝひよま
つのつを喉にてつめく鼻邑に呼も同し
○俗語につゝくいたんとてつをそへりをかくとあたる細色濃きをあ
つさり浮るをうつかり堅き紙かゝりてうりまさくとうつさりうそをとゝ
そりたることをたゝりひことをひつゝりかとやゝ紙かつこりきハだつを
きろぐりきしゆをきろ志りの韻もとより枚挙すへからず又音便によ
まつ將してむと成なり作りをあんまり志ある紙志んありすべるをぶ
んづりごぶりをざんぶりかごゝ紙かんごりつぶむとつんがりまざくし

き紙まんざりの韻もまゝ挙てかぞへかたし
○いきしちにおみいりぬの九言語の中にあるに時ハ右○そいひ書ハせり
よそおりみよと出ておりんと唱へちりひちと出てちりんちと唱ふるハ
音便にさる紙が語を志まて音便と假字也にあるハ故実を考ふるに
といへり
○開合すに入たる人のむ右○といふるあるみとむとれ乃にいへるもあ
るがごとゝ此うるに又源氏のたゝきこもたゝあるハ物もたゝと將しる
もあたゝたゝといふさゝあまてさゝらねやうによみ書ふこそ
○あハ是一切開口の始えむハ是法邑合唇の始えまてまへてれ發ちて
にあの箸と含めり音韻むに網まる紙りて將してんともなまり阿吽の
二音開合れ首尾にしてうんの音むと通用するも併せ考ふへし摩多
体文の圖にハうとんとむとを喉舌唇の二内に分てりうんむの二字ハ梵
字れ空點なれハ通用をしもいへり又吽ハ正音ハぎうくうんとよむハ借音
にして悉曇藏にも真言註云牛鳴邑也故據師兼世皆うんといふ不開口

呼之と見えたり韻学私言に釋氏韻学以阿斜二字攝萬音其声近遏
氳遏是開口第一聲而為聲音之始祖氳是合口收藏之声而氣出自
鼻竅此二字為萬音之大父母而氳亦統于遏天温淪而包地之理寓焉と
いへり
○口と箝めは五十音に白なし唯んの音のみをはりんは喉舌唇歯の餘韻を
よて鼻より發せり梵音にも鼻音ふよぶ事はり清濁音と隨鼻
音といふも見つせし鼻はりとより息のかよふ而なりされは息の字も
鼻心に从りしてもいへり
○本居氏の説にんは五十音のかなて鼻音なる故をて竪横の通ひ可
すされは上代にはんの音なし唯むと唱へてんとは唱へさりしなにかむとなめ
なもとも通し用たり大御(オホミ)とおほんちりひぢとちりんぢといふも後世の物
訛之字音をたんとなる故はすと通ひし用ね或はんを省きて用ねたり
りとよりて口の音に非るをもてしといへり
○倭語の發聲にんの音なしうまうめうもれ本なしは音便むにかよふ

とりてむまむめむもれ本なしも出なしはせりをしたりまみむめもれ音に
つきたる絶口を開かねうなる故もてむとも出本まる故へしんにはらはん
は五音の餘りなれは言の紫れ尾ひにはいひなせる也
○五十音にんの音なしよてむと一に通ひし用ねたりんはむの物音なる在
えされと音少しかはまりおほ故をて後人別にん字を製せりむ字はんに
通ひし用ましてもん字はむに通ひし用ねたりんはむ一説にうむ二字の中
にん字の聲にはりうんむ三字合せくうんと短ねるによへはうむとのことよりて
なに大日經疏なとには吽の對譯を用うともいへり
○わんかんさんなとをなる音といふ韻の清く揚まるくん字は无字の字
と変しらるなる今はれとも見もなる字形をとれり梵字にもたる○点といへるを
あるに傍假名れン字もまきを如へし
○んとをと通ひしたる例多し祢んごろを万葉集に祢もごろといひなんを祝詞
になもといひとをを蜻蛉日記にとんと出たる物語にまわらせんとまわら
せもと出さも候と平家物語にさんと作と出るんせんとをんと和泉式部に奇に

ふせもぢをあやとりてふとんとのるをいうんぞいうんぞ
ぞゆるんるゆんづくれおくしてをんとのるを酒時をとんのとれ足ねをたんね
件とそてん盛りとさゆんうりとをうんれ帰とゆてんなとあるれそとみ
みをんと水をる神をふをおりてゆんぶてきんをも頭の香を脱てとみと
するれおんぬとんとすの衣垣をきんかいとみ敏馬をみぬめとむのおと
銭をせにとひ蘭とられてといひ縁又宴とえよといひ紫苑とおねふと
いてあるる香をれさて和漢とせしそのく草菴集物名ふも茶盌とろや
かよこ衣とさふえとありさんい題昭もすもそひるゆれ文字多れ反
しとりうれんん字ン字の後人の所為なり七

○おとそてゆれ和流い場、ものつ明うる香顔の席てゆり假令いかきくけ
こをあてんいかきしいふ未定の辞へかくといふ已定の辞しかけといふ
人よ会をるおんくかてらふ自ら為の辞したりつてをを立てそふたち
とふ未定たつといふ已定たてふらんよ告なたをとふ自ら言をと
十行皆此法たるまれしそ中よかたるるくふ第五とゆるる詞を

雅語ふのこよて古来詠有ふも後世去ふ用ゐるうき五音の法の位の
とりて於下をを後詠有後去ふ用ゐるうんたんるくいうりんをを又詞の終
とをうふくゆるり

○むさたなてまやらを横行第一位の十音ハ諸聲の体ふて活用をる
時いそもまをかんたんるくいうりを始めふめづしとそそとのかもよ
ろおの第五位とを第一を相通ふもまを妙なるぞや字音の假名よゆるる
ゆうう十音皆同しく第一位を第五位と一音ゆさんいかんたん
なりて時い決して決せさるれを体と会ありんん五十音の餘韻をとりそ
○いきしちにひみいとねれ第二位ハ未定の辞なりても体ふありうくすり
ぬふむゆるうの第二位ハ已定なれも用ふるたふんいふおとをいて
ふくれ義度とさしとりてふさすれ義大力をたちとりてふんいの扇とあぎとりて
みとりてふおむの義前力をとさみとりてふんいそさむの義怒をいかりとりてふんいる
ふ義れおれて事物の名義とりて方ふ初へしうくすつぬふむゆるうれ接
音のこ合みて他の四音の接ハ皆開音なりてもかろあや

○うくすつぬふむゆるう第二の横行は皆決定したる詞の下にいへり
それが中にぬとすに絡らりしき詞なりいく歌孫ざめぬすれ
実なるとよみしはぬるんのさるなりといひ事もきしぬやと
よみしはぬるれ略語くといふれ歌くその孫ざめぬきえぬは不寤不
消ともきこゆるとそそくそと書ほずとのこ語来まり前には
ずともぬともよみ来まりさて音韻の序をもくいふ時ハ将
玉の義くたるんは将立の義くたるぬといふ時は不書の義となり
たるぬといふ時は不立の義となるかきぬといふ時は立くの義となり
たるぬといふ時は自立の義となる次にかくたるなといふ時は己に決定
の詞なれはふたるびぬといひたるし又かるんなかくんたるんなたるくさ
まとかるんたるんは将来の辞かくたるは現在の辞くそれにはあらはによ
くしたる詞く餘は此例にて推て知べし
○五音第一位と第五位とまけく通ことは反音抄に見えてうれ響
ある音は皆ひとつにきこゆるとかうとさうとそう

とれぬし五十音皆然り五音首尾の位一に帰するも甚不以為ぬ也
○凡そ一より二三と生し二より四と生し三より五と生するなに五音
相通の内に第二位と第四位とれ音はまけく通しやすしよて雅語にも
俗語にもかよりし呼その多し反音鈔に五音二與四三與五相通之と
いひ悉曇十二例にも諸梵語中伊翳通用と見えたりよて第二音に
切る語は第四音に轉るれ例多し
○第四の音活用するに第一位に轉するその多し目はめるるをまと轉するは
まなこまぶりのぬし天のなまとなり上のうは金のうな稲のいな酒のさる手長の
たなる手枕のこなくらとなる類そ也音もて呼も亦同し
○平上去入の四聲はとりも直さは唐音れひんぢやんきいぢつまて分な
又佳の韻は唖音なり灰の韻は唐倭同音尤の韻のぬきは引なり直に
用ね豪の韻は引なかうなりがるまてしやうなうなうと唱ふるれ言ふ
ままみむめもれ得音はひふへなとなるはんぢんまひぴびみまて知ぬべ
しといへり

○倭音の假字ハ江肴豪陽庚青合洽を皆開音とし東冬蕭蒸尤
緝葉業を皆合韻とするなり
○唐音とある二その前
一ハ五よ四ハ二よかよひ五ハ三なり二三の附ハかならずかなしきを
引いろ○をあるハ入声の足ときりをそ三字中略
南無阿弥陀佛を唐音にてのむ紙にて唱ふるの我との三音ハ一ハ五ふ
とあまあるをのして省ふね祢のおいうえをたちつてとの第一音省略し
て第五音となりくむみふれ三音ハ二三これ附ハならずかなしぞとよあるをの
みして佛をふと唱ふるハ入声の足ときりをそとよあるをく四ハ二よかよ
ふハ明とみんと呼が如し五ハ三ふかよふハ村とすと注さるゝもの引いろ○あれ
東をつんとよむの類とあるハ珍をちんとよむの類三字中略ハ玉
ときくと呼の類なりといへり
○五十音皆草音ならずして合音なし草音をましへて訓とん合音をいふ
ハあんわうわふあつあく等ハ又西土の字音の如きものといへりそれハ韻

律なるべし東宮切韻序にも本朝以呂音勝於律故以呂為自音以律為
助聲王仁以知其舌本之應呂敎人とみえたり徒然草に唐土ハ呂の国也
律の音なし和国ハ草律の国にて呂の音なしといへるハ心得がたし觧源
抄に呂ハ男音律ハ女聲とみえたりされど呂ハ柔音を用ゐるといひ律
ハ剛音を用ゐるといへるもあり
○倭語にも草音をもていふむふつくらきなど捨假字にいへり介をけと
よみ登をとてとよみ氐をてとよみ納をなとよみてをにとよみ作をさとよみ
吉をきとよみ役をえとよむの類をもて世にてにをはの紙をそめかずしるさ
ざるハ誤なりといへり又倭名抄よりの○字の文字入声の文字のかぎりて
さるしゝにハ皆をそしたるも万葉にハ新羅をしらきと書古今の序にハ喜撰
をきせんとかくもの皆其證也といへり
○倭語に伸詞あり約詞ありのべてちぢめて緩語也つゞめて急語也いふ
ことの葉れ自然に組みて約なるを又五十字文の反しに合を
反音といへり反切反名などいへるも此意也明覚の説に西天語法者柳

揚奢切といへるも意同し假令はいはうみ我何ぞといふはもう我反しふ
とあるを也とあるあふ我とあるふことといふはつあ我反したとあるを也されは
反しといふも其実はつてむるをあるべし
○倭語りと一つあして相將して其用をなせるその多しひろ將してふこ
つみろ將してむつとなりまろ將してやつとなりふつか將してもつかとなるなき
は相通し見を目の用とはみえと約むまはめとなるみらくはみるは義みえん
はみゆの義みせんはみをの義みれくはみんぬ乃義是皆反切しされともまた
文字は写してを変通乃妙を察をだし万葉集はみんを將見とありま
さにみんとあるのをしみたりは見有とありみてあるは義てあ反たく
みえぬと不所見とありみられざるはきんみせざると不合みとありみせ
しめさるはきえみえぬと不見とありぬとをと顔通せりみれくはと不見國
とありなく反ぬし
○助語のなりなりはふありけるを約めたる詞しざりなりはぞありなる
を約めたる詞しなりとつゝめてきしもいふまて万葉集は來字を用ゐた

を名にいふ物語にも矢洲の女はまやといふは京都の人はなといふまや反
なし尾張の人はでやといふと江戸の人はだといふでや反だし西土にも
何不を盍とし不可を叵とし之乎を諸とし如是を爾とし而已を耳
とす此皆二合の音をもて其義をとるしよて夢溪筆談にも二合とも
て切字の原とあるせりとあり
○阿行加行と通するは垣(カキ)はかい無(カナ)するをなうする畠(ハタケ)はたえ小(ニ)はをとよむの類
○麾毀暉虺にはくねの假名を用ゐ化花にはくゑを用ゐ勇用に
いゆを用ゐ炎塩にはゑむをもちゐ余與にはよを用ゐる是皆喉音中ゆ
ゆる假名は又齒音にしをすゐくし牙音にもきの假名にくゐと云け
の假名はくゑと云は悉く皆直音と拗音とを假名に使ひなるゝ開音
乃字は直音假名を用ゐ合音は字は拗音假名を用ゐたりだしへは
帰唱鬼貴の類はいくゐと云源氏変化の類はいぐゑむしへんぐゑ
と云ふ是は佛咒も多く拗延の音を用ゐ不空羂索經は尾をべゐた
をしやと誦するが如し又律の古本は坐字はつあれ假名を用ゐたり今は

唐音は在字などづめいと唱ふるやうしの語ふ高麗とかうらいと呼も亦物音く虜ハ魯と同音なるとうもろこしと来るも同しく夷れ世ハいふなりそもそもなりとぞいふ

○なにぬ孫のく行まみむめもれ行ハ漢音なりて漢ていハ呼たちつてとそひふへほれ行音とするなり那尓呉音なる漢音だち馬美呉音まと漢音だびのおくと及音鈔ハえけせて孫一ぬ仁名の横通ま漢音るしくもいふり

○唇音の清濁行をひふへほの音変してまみむめもとなることをそとなる同等といふ舌音れ清濁行たちつてとれ音変じてなれぬ孫のとなるそとなる同等といふ

○ふつくちきま平字ぬといふ此五字なれ韻となる字ハ皆入声の音なりいかくいひなくなる処をも又喉舌唇ニ内の音なりとをそ

○ぬまぬ○のたちつてとれ二行ま連ぬとをつよいふみつづきて音と変する処天王の王となるとと呼ひ越王の王とたなると呼ひ南音いうんと

うんく音いちんとうんぬねのと又南山変化となんざんてんぐなどとあら音乃文字の下に添るも添音となり葛伯一品とかつぺくいつぴんとうひる音れ下うてハ半濁と放なりといふり天半貧富雪片正夫のれをもとくいふり

○そひふへほの行の半濁となるハ皆上よむかなれをあら音とつづなれハなり

○字音ま及音なり初所とそとしてしゅ須酒とすとしてしん泥尼とちとしてつ通頭とつとしてきょ去虚とこことしてび薔薇とさうびとしてしん精進とさうじんとこともしてしゃ釋迦とさくやとこともしてしゃ畢竟漢語の自ら和語となまるなり日本紀ま細とせの音ま用ゐ細男とせいるうと呼ま一説ま洪武正韻ま初音祖となりそい漢音ま広韻ま細蘇計切音躋とあるもせいい漢音さいい呉音く台家の例時懺法の音ま合なりといふり又孟子れ蜀黍の蜀と朱註ま音初とそ初韻書ま廣の韻とく側陽反とそ陽と虞と同反切なりて和音ま響きのまゝなるとても陽とちりぐらいふ唱ふるれく蜀もすうと唱ふるとをいふり

○轉音のつゞまれるもの　素とすとし　農とぬとし　乃とのとし　佐伯とさへきとし　愛宕とおたぎとし　安宿とあすかとし　○たゝそ古名ふ音のこゝろ多くかゝりて万葉集に和とやまと水としとゞみ摸とむに用ゐる日本紀に弘遁とひろとし　楊とやぎともたゞもゝみ覇とゝしに過ることもち筑紫とつくしつんの音もみゝなし倭名抄に敦賀とつるがのこゝろみ緞喜とつゞきとよみ愛とおもえともみ英とあゝもわいともみ藝ときゝもけゝもよみ配拜とゝみ方芳とをゝとみ陽養とやゝこゝに要とえゝとみ意弘とゝむの転なり　○日本紀古事記に愛埃とえに用ゐ開階とけに細劑とせに帝題とてゝとみ泥とひ杯沛とゐ毎昧とめ禮とゐに限とをゝんに弘遁とひろに呼ぶ等四音を一音のみ用ゐ所以なり　○水の玉篇に戸癸切とあまい音戸なりて万葉集に水良玉水良島

おとしれ音と用ゐるりさんとすねるゝをりて戸れ音と避てすねるゝむめゝ一越衰の衰も初危反音のとゝの音ゝみ事も同ゝ西とゝの音ふ用ゐるゝも同ゝ四時とをいゝとゝみ句ゝるも同ゝをゐるも等い倭名抄ゝ音忽俗云尺とゐゝ一尺い梵云ゝ筋尺ともゐゝて長一尺の義ゝより改元難陳の例ふ易の語と引ゐあねゝとゝむとゐゝ実ともゐゝも変易の義とゐゝ忘めゝ推蓬籍語ゝ有諱悪字而呼為美字者如傘諱散為聚立箸諱滞為快子竈諱躁呼歓喜之類ともいゝり　○ゝみくせといふ正音ゝ祇されゝも云伎ゝふさひて変ゝ佛ゝのあ多ゐいりり女御とふうごとゝ近衛とこのゑとゝ冷泉とまいぜいとをゐれおれとゝいりり仁壽殿とぢんうでんとゐひ達智門とだていもんとゐ埃嚢抄ゝえゝゐり勘解由小路とかでんこうぢとゝ萬里小路とまでのこうぢとも亦ゐゝ　○字音のかゐふ三字ゝよりかゞとうり訓のかゐふ五六字ゝとゐりゝ二字

二字れ訓と合せて一字に約めよめるもあり

○凡そ字音は引と分かと清と濁るとれ四等にあることといへり

○音の假名は韻鏡とりて正しきやしされと蕭れ韻の假名につうてうけうせうれうねうと用来まるるもあり其はひやうちやうれ和を正しとれなれと有云物語なるにはあるひ来まるてとく云と故実とれおて法師はそふしなるとかうしと云鸚鵡はあうむなるへ来れあふむと云芭蕉はぞせうなれどもぞせんと云の和その所以あり必を改むべきにあらをといへり

○此方の漢音呉音韻鏡了訂しても反切に合ぬ音もあり之は古今に呼来つるく反切に違へるもあり又反切に合せ呼は異様に関へあしきれをて五音通して図のよれ音に呼るもあるくといへり

○いの音に以伊巳夷意異ホと用う数字は悉く韻鏡開轉の文字にあれ音に用う為違委威圍遺謂位ホの字は悉く合轉の字にえに用う盈衣叡要曳愛ホの字は悉く開轉乃字にえに用う慧

惠衛會營榮永穢回畫ホれ字は悉く合轉れ字にされは以衣は開口音に用ゐ為惠は合口音に用うまはとは開にしてれは合なるへまに我於共に合口音に属し我の音に用う遠越弘袁乎れに用う於穏飫ホ皆共に合轉の字にして差別ある事なし又てれの音に憶意と用う是開音れ字にて意は本音はなれども又音憶にて憶字と通用うるなに今は憶と同しくれの音に用うるに然はれをれ二字は開合の別にはあらて外に所以あるをもてて二字を使ひ分たりと見ゆいかえ忍とれの差別に緊りくれことしといへり

○明法家れ故実に笞杖徒流死の徒とつとよみ烏は古音とあるをうとよみ都は古書多くつとよみ淮は懐槐と同音なる我にいとよみ都はせ煨と醫家にういとよむの例皆唐音のまゝるものといへり

○古事記日本紀ホの古書多くは呉音を用られたりされとも明經の徒僧尼の輩に漢音を習はしめられたりて續日本紀以下に見えたり世に儒典は漢音を用ゐ梵書は呉音を用うといへるは公得かたし唯音

便よりて唱一來ヨリ多實ハ吳漢音ト用ル語話ノ如ク
吳音ト用ルトイヘドモ專ラ漢音ヲ用ル者ヲ云
なんと唱ルハ天下ノ通語ニ漢音梵音ヲ混ジ
おのがじゝのくにことばニ五音ヲ訛ル
ごんとるハ五音ノ内舌音七音ノ内ノ
とんとるハ五音ノ内脣音ニ屬ス
ぶんの字ハ五音ノ内脣音ニ屬ス
ちんとなるハ五音ノ内脣音ニ屬ス
そうそう辨一切ノ多キヲ云
○讀書口語トモニ漢吳ハ勿論ナレドモ音ノ仮ノ
儒道佛道ノ云ヒ通ノ字ハ音ニ讀ム神道ノ時ハ道ノ字ハ清音ニ名分等
分ノ字ハ分字濁音ニ幾錢幾分ト呼ハ一分ヨリ九分ニイタル清
音半濁ト用ル尺ヲ云ヒ呼ヲ改ル一書ニ唐音ハ必無ト通達ト
變ズルモ是ナリ
○ヲヲ同ジクヲ本ヨリ名同ジクシテ物實カラヲ改ルヲ云

此本ノ如ク我ニ出レ假字トシテ云ヒ
呼ヲ改ル又平上去入其音ノ清濁輕重ヨリテ名目ヲ相分ル
ヲ云ヒ唯其始メヲ改ルヲ指シテ從ヒ改ルヲ
ラン今ニ至ルマデ知ラズ云ヒ
○日本紀ノ印本ニ字ノ四週ニ圈点セルヲノハ和訓ノ四聲ヲ全
ク施ルヲ訛謬モ多ク古本記ニ
ハ注セリ但入聲ハ乙ノ字ヲ注
ト云ヘドモ稀ニ平聲ヨリ端ハ上聲ニ
ハ云ヘドモ長竹嵩ノ如シ著ハ去聲ニヨリ
蚓ノ別ハリテ音ノ輕重自ラ判然
亀山也猶如亀尾讀之ヒ和名抄ニ簟ヲ上聲之重菊ヲ俗ニ本音
之重ト注セリ凡テ平生ノ口語此類多シ
ヲ以テ識ノ音ノ如キ七韻学私言ニ本邦之語猶華域之音今呼柳曰葛
幾則雙深曰渇起則雙淺俱無高低而平聲也呼垣曰葛起則先深後淺

而如上声叶韻曰湯幾則先淺後深而如去声又如上下二字各上去而声互異其義而與國語自相符上曰湯弥下曰失麼則上為去声下為上声乃指荘高在鼻之詞也上曰遍麼下曰沙麼則上為上声下為去声乃幷之降之之義也云々

○私記云泥土煮尊沙土煮尊与就て問此二神御名煮同字也何故有変声之讀哉答是據古事記上煮字讀上聲下煮字讀去聲其由雖未詳如此之神名皆以上古口傳所注置也云々古事記中此去声唯一ツのみにて本音去多なるを此地迩云つぐくとりて上なるべき上ゝ他の例よ同し去の本音なるべきを上の上なるゆへ上と讀ならひて忽ち音化変るをもりて如此ならん

○我邦ハ入多れるゆへ入声ハ単音のみにて韻律と主とせずして西土の音ならひ入声ハ此方れ往い悠て入声ハ唐音ともに唯入声のみ此方れ一音の如くみて餘の三声れ類よ変るうさいハ此方れ音ハ入声ハ此方れ差別ハ行りて三声れ関よ入声れ別よ

入多ハ無ゝ七ゝ

○鴨ハ平声多ゝ鴨川ゝて耐ハ上声鴨社ゝて耐ハ去多ゝつゞきてよゝ同治もあれゝる事ありされ古事記よ豊雲野神の雲れ字ふとゝりてハ本音平多ゝ紙雲野ゝつゞくゝ上多ゝて餘もけり倣ひて知へし固より本音れまゝ多ゝ注す平去れ変ゝて上声と云ハ平去よ変ゝる称ゝて上声れ平去よ註をゝき示ハ自らなゝるしとのゝり

○悉曇三密鈔云初金禮信来留對馬音次表信公来筑博多傳漢音是曰唐音云々悉曇藏ハも金禮信表信公よ拳て我日本元傳二音と云々云々いつもれ代よありしやんいゝと詳ゝを對馬貢銀記よハ欽明天皇之代佛法始渡吾土此島有一比丘尼以呉音傳之云々政事要略よ大織冠鎌足執政時百濟禅尼法明来于對馬嶋呉音誦維摩經因呉音曰對馬讀乃呉音之源起也云々聲音對ハ呉

人來在應神天皇崩年與尼相隔三百余年其取始失考也とのみいひて貢
銀記に日域の經論皆用此音故謂之對馬音とのまた尼い佛經ゐ呉音
を用ゐし始なり松下氏の說に菟道雅郎子師王仁習諸典籍是
漢音之始也とのるい信得てし山城の音い呉音多くして古云ひ音後日用の俗語多くい呉音
なりきされい宋の石林送順空偈ゐも自作呉音唱月寧とのり王仁い百
濟の人ぞそもまた呉音を孔いさもいりぬし漢音い推古天皇乃
御代遣唐使以後の事なり細し音博士大唐續守言薩弘格に初て賜ひ
しこと持統紀に見えて儒釋とも漢音を習りめれし事後の国史
に見えたり洛の東寺ゐ經藏ゐ納られ大政官ゐ應讀佛教經呉音
儒道兩典漢音醫書隨文便二音交雜といふのあるに見えたれを正
史に出ざれども世ゐ伝へし說とぞおぼゆ韻學私言ゐも及中葉定令
式使讀儒典以漢音讀佛籍以呉音道書醫卜之記呉漢雜行兼傳
至今不改矣とのり今真言理趣經ばかり漢音にてあり所以あるも

〇漢音い長安の音呉音い江左の音なりとそれぞれの名い我邦の西土と往
來せし始めい後漢書三國史ゐよりて云ひ出しものなるべし然
況んや後漢倭傳に自武帝滅朝鮮使驛通於漢者三十許國國に皆称
王とのるい國造縣主ゐ至るまで私に通せしものの多りしとそれい時
既に漢音い熟せしにて我皇史ゐのせられその皇史に見えてある應神
紀を始めとして呉に書を授しもまた時に始まりしに非ず法乃
舊記にまの呉音を伝へしさまを記されたるいかにぞや羽仁易かるべ
その音もまた羽仁易かりしも音方ゐをきゐれ
併せる後なりと西朝ゐい達せさるゐ多かりて呉とのるい故にや後雄略天皇
九年に後漢の使ゐ對へられし時乃至「呉ゐ後漢略天皇九年詳ゐ宋書に見えたり宋い東晉
それ以代呉と往來せしもの見えたり宋書ゐ見えたり宋い東晉
禪と受て江東り都せしゐより呉とのるい故にや南宋
推古以代ゐ隋ゐ聘せられしを日本紀に大唐とあるい隋ゐかたく唐ゐ
禪り唐家久しく治りてなき事ゐ注せりのくいさ

せしまたる如くしは後孝徳天智の御宇に至りて禮樂制度多
くは唐に擬せられたれば音もまた改まるをもとの上呉のと
南方荊蛮の玉色土の音なるは刊誤にも呉民之言如病瘖風而禁とも
いひ馬伯庸も四方偏氣之語不相通曉惟中原漢音四方可以通行といへ
ましたるを漢音とおもひしめられたるとみえたり前漢は長安に都し
後漢は洛陽に都し隋唐ともに長安の都なれば是我漢音といひ
中原の正音とはすると

○打聞集に問唐音は漢音なりや唐音と漢音とは実なりや答実
は二ツ也今世人倭音によりて呉音の外は漢音と思へり凡そ呉漢
唐宋の四音の実なり白色二字の如き呉音にはひやくしきといひ唐
音にははきせきといひ漢音にはんくしきといひ宋音にはせといふ
阿弥陀二字の如き呉音にはあみだといひ漢音唐音にはあびたといひ
宋音にはおびとといふ法の字は唯一て知一きよしみえたり此集は仁
和寺の經藏にあり書体を詳にするに藤原清輔の作なる一しといへ

ま和尚と天台にはいふまでもなきとよみ其言にはまでもなきとよみ禅家には
我もなきと唱へ律宗にはまでもなきと唱ふるも右の訣あるなりや漳州音
には今へいしゆんと呼ぶまでも又達磨を東寺にはたるまとよみ山門には
だるまといふ漢音なりはだつまとこれをいふ今はたるまともだるまと
もよむるは梵語の習ひなりて実には東寺の僧もだるまといふ一きを
此国にていきしらぬなれば清てよみ来るは故実如へしともいへり
今に至りては明より清と称て世も移り北京南京大に実にして我
に近き福州漳州の音も雑しは其唐音と称するのとより一定を
べきにあらずかし

○漢音呉音とをに今の唐音といふものと大に同しからを今いふ
所の如きは倭の漢音呉音にしてまた西土の漢音呉音にはあらぬさ
しは其始め儒典梵書とをに韓国を歴て我邦に傳へたれば韓音
倭音相混して今の音といふなる成へし故音のとより風土の移り
しむるものなれば自ら変せるも我邦へうしす韻学私言にも應神

朝鮮国献経史貢博士而邦人即能通之既有文字則必當有副字之音以国俗習畳音之語而不諳混成之音乃雑用華韓之音以呼華字単音以録国語耳今所行呉音蓋是也

○漢音正辨之漢音ハ中原の音古への韻書の撰ミ糸純一ニして異ることなく唐音ハ彼土鄙語ゆへ音不同多き故ニ字彙ゟも讀韻須漢音若任鄙語便致差錯とハ古家傳ふれ例時懺法聲明集の中ゟ漢音純轉のミゆへニて今ハ漢音と異ニするハ半百餘字乃ち此例時懺法等の音ハ慈覚大師中華ゟ傳教大師の所学を兼習をもゆへ大学寮ニ参し漢音を読習ふ人と一心戒文ニハ従来ハ従昔大学寮ニて読ゟ遺音多ゟ知ぬへし今俗儒ゆへ所謂漢音のミゆへ唯ニ韓乃音と雑ふのミなゟ其傳を多ひ何の節奏もなくなりゆくをのミをそれ今ゆへ漢音ハ全く和讀として中華ニ此音なしとハ謬ニ今をつゝ唐音とハ吾國ゟ中華ゟ使せゟ云ゆふもゆへニ

ハゟも唐の代ニ成りゆへ殊ニ頻ゟ漢音ニ在ていふ唐音ハ宋ニ在ていふ宋音ハ漢音ニ在ていふ漢音ハ唐音ニ在ていふ唐音ハ通俗の音ニさゝれる老学菴も語音之正取ニ之中原雅俗ゟ知ぬへし吾大師上表の文ニも家證未学唐音亦暗譯語忽入異域恐煩述緒竊見沙弥義真少壮聰悟頗渉経論早習漢語粗知唐話天恩差義真為求法譯語とゟの漢音とハ雅俗の別ゟ吾宗保元以来頻ニ干戈を経ゆへ本式を失ひ縦ゟ例時作法法華懺法及聲明集等漢音ゟ誦習ゟそこの中ニ今俗間ニハ全ふれ漢音と異ニするもの一二と抄出する勝衆稱昇並ニ志の音とゟく呼ひ億膳並ニいくれ音ゟ白色ゟいせきニ呼ひ食ゟ如きゟゟて又雲云の字並ニいんの音ゟく洪武正韻ニ二字ゟも真韻ニ入員字云員ゟ音雲ニ注ゟ行人子員の員ニ音ゟ呼ゟ云

員ヲ在ていんの音と存し雲云ヲ在ていんの音と存し沈と音澄と注し振と音正と注をるが如きい亜ヲ宋音うて俗音ヒ又勝稱の字唐音ヲいろんと呼ヲ又國字りく漢字と音をるが拗音を雅とし直音と俗とす近文中採行の法華懺法の國字尚正しく恐共くねうと出ちめう恵けえい月ぐ名つとり添氏平家の如きぐ名ん雅しげんげんへいけい俗ヒ又空の彦底多聲い語音の雅ヒ蘇漫多聲い語音の俗しヌ鶴林玉露ヲ我す硯と松蘇利必筆と分直墨と襲彌頭と加是羅手と提の類い並ヲ漢音みて唐音ヲいのうす松と岩直と俗り着ヲいすとそこの音生す康熙字典ヲ出松息中切音松とる南山の行幸鈔乃中ヲ畏難と古来ぐくとありり難奴雖切音泥とねるは難ともれい音ねうくや同文通考ヲ漢音ハ是彼国そのヒ中原れ正音みうヒ大学察ヒ教ていヒ音ヒ唐音ハ近代ヲ及ひ取用うる事多しとの名ヒ信ヲ信すへ一ヲ名ハ漢正音漢俗音呉音和音れ四音れ分ちねりとヲ知ハ

漢正音ハ古への漢音純轉のもの漢俗音ハ鄉語の音今の唐音是也呉音ハ江左の音ヒ和音ハ国音所謂呉音ヲ近き者也とうてあり

○今の唐音ハ南京の音ヒりく天下の正音とヒ南京ハ古呉れ地りしかく本大ヨリて世ヒ伝ハ孫ヒ項羽物風流ハ地ヒうて来るしかはヲ以て文雅うれハ語音もまヒ従て正きもの何ヒの国も皆然ヒ称ヒても明の代ヲ以て真正音頓ヨ変りてのく云くりうヒはつうす秦漢以来漸とヲて変ハ南方れ風気の然しむる所ヒいつて西川氏も十五者ヒヒ南京れ視とりく詩とうたふヲ以の音律とりく則ヒ其日ヲりて平安京れ初とりく法とる如しまヒ日本ふく渡来ヒる字韻南京同音のヒれ多一こいり

○我邦の書史漢字仮用ヲ以和語ハ主漢字ハ皆ヲまハ或ハ字義と備て和語仮通し或ハ類字仮取て義と備ら事の或ハ好字仮借て和語

我俚言ニ或ハ漢字ニ仮借シテ用ユル事アリ一例ヲ挙ンニ
○俗名及ビ倒及ビ神漏伎神宮美ノ如キモ皆伎ハひこノ倒及ビ美ハひめノ倒及ビおこひ及ビかむひるみ也西土ニモ此例アリ一事ノ世説ニふたこうノ二重及ビ故紙ノ故ノ如キ皆ソレヨリ出ヅルヨリ出ヅルヨシアリ
○譲ハゆづるヲ訓ト結ヲ解ヲ浮ヲ沈むヲ面ヲ背ク臣荒ヲ定まるヲ訓ノ如キ皆ソレヨリ出ヅルヨシアリ
○朝鮮の諺文モ和音五十字ヲ彼ノ人ニ学ブニハイ井ともカ加ヨリ工ヲ通シテ加ヨリヲ才皆ヨリ作リ出ス此ノ悉曇ニテモ加ヨリヲ才ヲ作リ出ス此ノ三音ヲ単複ヲ以テ変音ヲナス諺文モ加ヨリ作リ出ス此ノ井ヨリ工ヨリ才ヨリ皆ヨリ准ヘ一副ヲ以テ悉曇家ノ旧音ハワヰ音ヲ以テ新音ヨハワヰ音ヲ以テ各ゞノ音ヲナスヲヤ
○佛経ハ呉音儒道両典ハ漢音云ヽ此事本朝語園ニハ延暦帝ノ制

ヲ以テ漢音及ビ訓トスルニハ信ヲ取ルニ足ラズ
○古史通ヨリ上古ノ語言ハ今モ猶ホ存スル於朝ノ詔ト紀ノ撰述ノ者ノ如キハ延暦代州縣郡国其沿革同シカラヌヲ以テ古ヲ考フルニ自ラ其徴トスル不足ルヲ知ルベシ
○羅什大般涅槃経悉談章中国品ヲ云ヒハ五十音ヲ悉談章也ト云ヘリ今ノ悉曇家ノ旧音ハ此ニ合ヘリ
○遮支朱制懲也たちつてとハ吒知嘲啼潮也かにぬ祢ノハ那噉奴泥艫也ヒふへほハ波鉢哺閉報也まみむめもハ摩縻謨謎唱也やいゆえよハ耶移喩栧曜也らりるれろハ羅利盧戻協也ヲぬうゑおハ和醞吁嚘浩也此皆牙歯舌喉唇ノ音ヲ云ヒテ和語ヲ勘ヘ五十音ト定メラレタルヲ吉備公音韻ノ学ヨリ長ヲ以テ吉備公音ありて和韻五十字ハ此中國品ヲ略出セリトアルヨリ云ヒ来ル本也トアルハ常州月

山寺邦敬の悉談章に見えたり

荘原府